
でいばい youth

TOKIAME

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

でいばい youth

【Nコード】

N5117Y

【作者名】

TOKIAME

【あらすじ】

男女2人の視点から物語を読み解いてみよう。青春なんてくだらなくて、意味の分からないものだけこれだけは言えようか？俺が、あたしが、人生の主人公だ。——現在、シグレ名義でテンミリオンにて公開中の作品。名前のみ変更しております。

プロローグ（前書き）

全部改稿、プロローグ。

ブローグ

青春が青春を裏切りました。

俺の幼馴染（仮）は初めての親友。
あたしの爆弾は一生処理できない。
僕の頭は誰にも理解できない。

私の恋は恋ではなかった。

俺が見た世界は全て美しいもの。

わたしが恋したのは一匹狼？

俺が他人と話すのは自分に線引きするため。

自分の気持ち理解できないのはいけない？

ボクが恋するのは愛だから。

私が持つのは余計な上背と義理人情。

人が人を信頼できないのも当然で、自分が嫌いなのも思春期で。
愛を恋と呼び、死を生と呼ぶ。

青い俺たちはまだ、青春に翻弄されていた。

王の優越

あの頃、俺——宮本龍紀^{たつき}は王様だった。

当時の俺は七歳。

大人でも扱うことの難しい高等魔術を、難なくやってのけることが出来る、若き高等魔術師だった。

炎を出して自由自在に扱うことが出来るのはもちろんのこと。

物質を創造する事によって文房具や生活用品、電化製品や、更には家一戸を創りだすことだって可能。

それを何処に置いておくのかなど、そういうことは聞かないでくれ。

そんなもの、創ってもすぐに壊している。

どこぞの錬金術とかいうのと違って魔術に代価や対価は無い。

大気中の魔力を少し頂くだけ。非常に便利。

魔術が無ければきっと俺は生きていけないんじゃないかな、と思っていた。

いや、もちろん科学がここまで進歩していなかったら、電化製品を創造できることは無かったけれど。

そして俺は数多い魔術師の中でも貴重な高等魔術師だったから少し、調子に乗っていたのかもしれない。

* * * * *

小学校入学式、当日。

『宮本くんって、高等魔術師らしいよ』

そんな噂、もとい事実が学年中に広まった。

その噂を聞きつけた同じクラスや他のクラスの同級生たちは、自然と俺の周りに集まってきた。

同級生の中に他に高等魔術師はいなかったから俺の所に集まってきたんだろう。

集まってきたやつには俺のとおき魔術を色々と見せてやる。

魔法律、というものがあり、魔術は厳しく取り締まられているが、そんなもの、ばれなければどうってことはない。

ただの、形だけの法律なんだろう？

同級生から注目や羨望の的となつてその中心にいた、宮本ブロント。^俺

小学生ながらにとても、とてもいい気分だった。

ああ、こんな立場に居座るのも悪くないな、とそう思った。

入学当初から毎日毎日そんな扱いを受けていたためか、いつしか俺は羊を率いる羊飼いだ。

ようするに、学年のリーダー的存在となっていた。

同級生の中に親友、と呼べる存在の人は一人もいなかった。
けれど、悲しくはない。

自分を慕ってくれる人が居る。それだけで俺は満たされていた。

この学年は俺を中心として回っている。

俺が、全てにおいて一番なんだ。

——そう考えていた。

敵前逃亡（前書き）

赤石くん登場。

彼の性格が年の割りに大人びてるのは仕様です……；

敵前逃亡

「君に靡^{なび}くつもりなんて、毛頭も無いよ」
「うへえ」

小学二年生になった頃の事。

俺が上位の存在となっても靡かないやつは、当然だけれど学年の中でも数人はいた。

そいつらも態度では反抗心が俺に向いているのはよく分かるが、直^{じか}に面と向かって言ってきたのはこいつがお初だった。
初めまして。

だからびっくりしちゃって、うへえ。

こいつはニヤニヤとした笑みを浮かべてこそいるが、剣呑な目付きをしていた。

剣呑、というよりも下等な生物を見下すような目。

……ム力つくなあ。

「ああ、そう。ム力つく？ そりゃそうだよねえ。

今までこうやって言われたこと無いだろ？

言わなくても別に分かるんだよ。裸の王様、宮本龍紀くん。
君のその、表情とか分かりやすいんだよ？」

その話し方と口調でム力ついた。

その物言いですらにム力ついた。うざい。

なんで反抗してくんだよ。何様だよてめえ。燃やすぞ。

頭の中でぐるぐると、黒い考えや罵倒の言葉が色々と過ぎる過ぎる過ぎる。

俺がそいつの目を見据えながらただ黙りこくっていると、そいつはへらつと笑い、赤石瀬七、と言った。

「憶えといてね宮本くん。僕の名前。

それともこんなやつの名前憶える価値も無いってかな？
憶えといて損は無いよー、きつと。

それじゃまた、お邪魔しに行くよ。君の無意味な行動の邪魔を、
ね。

って言っても、同じクラスだけどね！！」

ははは、とそいつ——赤石瀬七、と言っやつは、身を翻し笑いな
がら去っていった。

ていうか、あれ？ あんなやつ同じクラスだったわけ？
ていうか、居た？ という感じ。

まあいいや。後でそこら辺のやつに聞いてみよう。

頭をわしわしと掻きながら、赤石と正反対の方向に歩いて行く。
本当にイライラするなあ。後で目に物見せてやる。

そう思いつつ、こんなことも思った。

それにしても、胡散臭い。

醜い能力

「天才的な才能を持つって、大変だねえ」
「……うるさいっ！」

小学六年生になった頃のこと。

俺は、王の座から蹴り落とされた。
いや、自然と下へ下へと墮落していく羽目になった。

羽目というのはおかしいかもしれないが、王から外れたのは確かだった。

それは俺のせいでもあるけど、世の中の風潮とかのせいでもあった。

俺が王様のような存在になれたのも魔力のおかげ。
ならば、その魔力が無くなってしまえば、俺のこの立場に存在意義自体が無くなるようなもの。

そう、俺の魔力は忽然と俺の中からその姿を消した。
パツ、とスツ、と一瞬にして消えたようなあの不思議な感覚は、
今でも憶えている。

だからもう、炎を出すことも、空を飛ぶことも、物質の操作をすることさえもできなくなった。

そこらへんにいる、ただの一般人。一般 people。ピーポー。

そこまで成り下がった俺には当然のように誰も寄り付かなくなつた。

魔力が使えなくなつた途端だ。

でもその前にそいつらが俺の周りにいたのは、高等魔術師であつたからだけだと気づいていれば

こんな事にはなっていなかったかもしれない、と今更後悔する。

親は頭の良い子と仲良くなりなさい、と言う。

馬鹿な子と一緒にいると悪い影響が出るわ、と言う。

そんな事は全くないというのに。

けれどまあ、それが世の中の親の考え方として定着しているのもあるから、俺の孤独化に拍車が掛かったのは確かだった。

俺は馬鹿だから、親に仲良くなるな、とか言われたやつは馬鹿正直に俺から離れていった。

すると結果的に俺の存在、学校の中での価値は

《勉強のできない、運動馬鹿な出来損ないの男の子》

とか、そんな感じになつた。
というより、実感が湧いた。

今でこそ、こう気楽に言えるが当時はとても悔しく、悲しかった。

ちくしょう、俺が一体何をしたんだ、と。

家に帰るとベッドに潜り込み枕に顔を押し付け、涙で顔がぐしゃぐしゃになるまで泣き続けた。

嗚咽おえつと涙がこみ上げ枕がぐしょぐしょになるまで泣き続け、そのまま眠りに落ちた。

敗北の感

翌日。

朝早く登校した俺が教室の扉を開けると、目の前に赤石がいた。

「……うおっ」

「おっはよーございます？ 宮本くん」

疑問系で挨拶した赤石はニヤツと笑ってその場からピョンツ、と一歩分ジャンプして後ろに下がった。

そしていつの日か見た、あの見下すような目付きで俺を一瞥すると、すぐ傍にあった机の上に座った。

「んー、挨拶でさえ返してくれないのかい？ 宮本くん。

他のクラスから君のためにわざわざ来てあげた同級生に一言もくれてやらないなんて、冷たい男だね宮本くん。

ほらほら、挨拶挨拶！！ 友好な関係を築くにはまず挨拶からってね」

ははっ、とさも楽しそうに赤石は笑う。

俺が眉を寄せて赤石を睨めば、そいつは不満そうに唇を尖らせる。

「ここまで完璧に無視されるとはおもわなんだよ！！」

これ位すれば大抵は挨拶とか返してくれるのにねえ。ま、それも怒りながらだけど。

何がそんなに不満なのやら。全く理解できないよ」

「……んな挑発されるように話されたら返す言葉もねえよ」

俺がやっと言葉を返すと、赤石の頬がニヤツと緩み口元はニタツと歪んだ。

赤石が手を上げ、俺に向かって、こっちに来いとでも言うように、前後に振った。

手を伸ばせばぎりぎり赤石に触れられるかどうか、くらい近くに寄ってやると、赤石は俺の目をじっと見つめてきた。

相変わらずあの不躰ぶしつけな瞳で見ってくる。

あまりに不快感が募つって視線を逸らす。

「お、照れてるのかい？」

「違う。んなわけあるかよ。それにしても、何だよ？」

「お前違うクラスじゃないか。しかも俺に話があるのか？」

「んー、あるといえはある。無いと言えば無い、ってところだね。」

君がさっきの僕の言葉に違和感を覚えたかどうかで、これからの話は変わるんだよ」

赤石は、そう言って口笛を吹きだした。

よく知らないが最近流行りのCMの曲っぽい感じがする。

無駄に上手いからそれをBGMに赤石の言葉を脳内で反芻はんすうした。

『おっはよーございます？ 宮本くん』

『んー、挨拶でさえ返してくれないのかい？ 宮本くん』

『他のクラスから君のためにわざわざ来てあげた同級生に一言もくれてやらないなんて、冷たい男だね宮本くん』

『ほらほら、挨拶挨拶！！ 友好な関係を築くのはまず挨拶からってね』

違和感、発見。

「……おはようございます?」

「違うっ! つーか挨拶は確かにしてなかったけど!」

「嘘。冗談。今のはただの朝の義務的な挨拶だ。……友好的な関係を築く、ってところだろ?」

「せーかいー」

俺が言おうとした事を牽制するように右手がすつと上げられた。その手に目を向けている間に赤石は、左手をポケットに突っ込んで、小さな袋に包まれた赤い飴玉を出した。

無言でそれを俺の方に投げ渡し、正解賞品でーす、と言ってピーンしてきた。

「おいしいよその飴。僕の一押し。ちなみに味は梅干。すっぱいよー」

「渋いな、お前」

「渋いよ」

少し文句を言いつつもその飴を口の中に放り込む。

梅干の独特なすっぱさと、少しの甘さが口の中に広がった。

嘲笑の君

ころころころころころころ、ころ。

ガリッ

口の中で飴玉を転がしながら、俺は友達なんていらねーぞ。と言った。

「あと一年、あと一年我慢すればいいだけの話だし」

「やいぼっち。一年間ぼっちなんて寂しい話じゃないかい。

こういう時は、素直になって友達よろしくとか、なんかあるでしようが。」

反抗期なんてカッコよくないんだよ？ 宮本くん」

「強がつてなんか、ねえし」

強がるのは、もう飽きたし。

心の内でもぼそつと呟いてみた。

おお、今巷で大流行のツンデレだ、とか赤石が楽しそうに言う。

「ふむ、まあとにかく友人は必要としてない。ということだね？

いやはや僕としては友達になってほしいところなんだけれど、君が拒絶するなら仕方ないね。

残念、至極残念」

腕を組み非常に残念そうな顔をしながら赤石はぺらぺらと喋り続ける。

いったい、どうやってたらそこまで話のネタが尽きることなく話することができるのか、教えてほしい程だ。

「ちょっと待てい」

今度は俺の番だ、とでも言わんばかりに右手をすつと上げると赤石の言葉がぴたっ、と止んだ。

飴を舐め終わってもなおすっぱい味のする口の中の息をふー、と吐き出して話し始める。

「友達になりたいって、どういうことだよ？」

「そのままの意味故に僕から話すことはないよ。」

強いて言えば、宮本くんといれば面白いことがある！ と直感できゅぴーん、ときたからだよ。

あの感覚は初恋にも似ていた気がするね。好きです！」

「そりやどうも」

そんなことはどうでもいいんだよ。

へらへらと笑っている赤石を睨みつけると、むすつと膨れた。
可愛くねえ。

「それで？ そんなどっかで聞いたセリフ代用して俺の事、心の中で笑ってんじゃねえの？」

どうせ、なんとも思っていないんだろうなあ。

嬉々魔術

「まっさかー」

どこかぬけたような声で答える赤石を見やりつつ壁に掛かっている時計を、横目でチラッと見る。

もうすぐクラスメイトが登校して来る時間になっていた。

そろそろ居心地の悪い時間帯が来ると思うと吐き気がする。

お腹の辺りが重くなり、ぞわっと腕に鳥肌の立つ感覚がした。

「笑ってはいないんだけれどね……。それじゃあこっしょう。」

僕が今日中に君の何の役にも立たなければ、友達になるのは諦めるよ。

その代わり！

一回でも役に立てば無理にでも友達になってもらっよ。君が何と言おうとね」

「……なんだそれ。そんな賭け事みたいなのを俺が受ける必要性とか、メリットが欠片かけらもないじゃないか」

「たしかにそれはあまりないだろうけれどね、得る者は僕だよ。

友達友達。

そうすりゃ一人でもないし、周りから取り残されることもない」

先程、無理にでも友達になる、と言っていたから俺がその賭けを放棄しても、多分無理矢理引っ付いてくるんだろっ。

昔から切り替えや踏ん切りが早いなど評されている俺は、諦めてその賭けを承諾しょうたくした。

単に諦めが早いとか根性が無いとかそこら辺なのかもしれない。

承諾の言葉を赤石に伝えると、心底嬉しそうな顔をし机を蹴飛ばすような勢いで飛び降りて

ギリギリまで俺に近づいてくると、両手を掴んで勢いよく上下にぶんぶん振った。

痛い痛い。

「ありがとう！」

「……本当に役に立つんだか」

「そこら辺はちゃんとやるよ」

そう言うとき赤石は左手を軽く上に上げた。

かと思つと、その手には俺の愛用の青い筆箱が乗っていた。

「ほら、早速忘れ物のお届けです」

「……マジ、かよ」

早々と赤石が役に立ってしまった。

あっさりすぎて、何の言葉も出ない。

あまりにも唐突で、やるせなさ俺を支配する。

俺の空いている右手にぽんと筆箱が乗せられた。

「ほらー、もう。宮本くん友達いないんだから鉛筆なんて借りれないでしょ？」

気をつけなきゃ足許^{あしもと}掬^{すく}われる……とは違っけれど、困るんではうが」

「……ありがとうございました」

精一杯の皮肉を込めた言葉と、いつもと違う低い声でお礼を伝える。

その俺の少しの声の違いにも気がついていないであろう赤石は、ニコニコと笑っている。

してやられた、と思った。

赤石は魔術師だから、魔術を使って助けるのは目に見えていたが忘れ物を届ける、という形で役に立たれたのは意外だった。裏をかかれるというのはこういうことなのか。

「とりあえず、今日からよろしく友達」

そう言って赤石が更に強く握った右手を俺は握り返した。

「よろしく、お願いします」

朗報機関

赤石瀬七は不思議なやつだ。

人の事には躍起になっても干渉してきて、何もかも引つ掻き回してくる。

それが迷惑とか嫌だとかどうとか聞かれるとそうでもないんだけど、むしろ感謝することも多々ある。

でもあの性格はなんとかならないかと、日々悩む俺がいるわけだが。

それを抜きにしたとしても、瀬七はやけに俺に構ってくる。

そりゃ、お節介とかそういうわけじゃなくて気紛れなんだろうけど友達になったあの日から、高校二年生になった今日まで

友達でいられて親友になったのは、互いに支え合つとかそういう青春臭いことをしてたせいだろう。

そういうことにしなくては、俺の気遣いの心が痛む。

そんなもの、無いけれど。

あまりに俺に構う瀬七に対して、自分のことはどうでもいいのか？ と聞くと

「はは。自分のことどう思ってるかだって？ 一番好きに決まってるじゃないか！」

と言いやがった。ナルシストかよ。

でもまあ、瀬七と俺の友情は不滅だぜ！　とか少年漫画臭いことを言っておく。

それで、場を治めようか。

「おや、おはよう宮本。今日もお一人様ですか。まったく、寂しい奴だねえ。」

同情なんて通り越して一抹の哀れみさえ感じてしまうよ^{いちまつ}」

少しの気遣いを見せることもなく、気持ち良い程の毒舌で瀬七が朝の挨拶らしきものをしてきた。

……うん、泣きそうだ。耐える俺のメンタル。

瀬七の言葉通り、実際に俺は一人で自分の席に着いて漫画を読んでいた。

しかも、俺の席は教室の中でも一番後ろの一番窓際。校庭がよく見える。いい天気で何よりだ。

そんな席にしかも一人にいるもんだから、とても孤独な奴に見えるんだろう。

瀬七の席は対照的に一番前にあるが、そんなことを気にすることなく自然に俺の前の席に着く。

「どうやら、高二になっても登校時刻の20分前に学校に来る癖は治ってないみたいだね。」

そんなに早く来ても暇だろう？　特に用事があるわけじゃなからうに。

それとも、あれ？　一人で登校する様を見られたくねえ、とか？」

後ろを向いたまま、椅子の背もたれに前傾姿勢で、もたれ掛かる様な格好のままで話しかけてくる。

俺は漫画をパタンと閉じてドン、と瀬七の頭を漫画で小突いた。うるっさい。

「いたっ」

「ふん。登校する時間なんてどうでもいいだろ。癖はなかなか治らないとか言うし」

「そんなこと言っちゃって。本当は友達が僕しかいないから一緒に登校する相手が」

瀬七の言葉を遮るようにもう一回、ゴツン！ と今度はより強く漫画を瀬七の頭に振り下ろした。

「いつてえ！ とさっきより大げさに喚く瀬七を横目に、また漫画を読み始めた。」

これで、少しは静かになってくれたらいいものなんだがな。

衝撃告白

「……ふー、いったいなあ。飼い犬に手を噛まれると言っかなんと言っか……」。

ところで宮本、ここで突然ですがお知らせがあります」

「なんだよ」

漫画から顔を上げないまま瀬七の声に耳だけを傾ける。

りーでいんぐナウやつに声を掛けるな、という俺なりの反抗心の表れ。失礼だとは思っけど。

早く続きが読みたいという考えで俺の頭の中はいっぱい、ペー
ジをぺらぺらと捲^{めく}り続ける。

しかしそんな少しの願いも叶わず、瀬七に両手で顔をグツ、と掴まれ漫画から顔を上げられる。

「聞いてください」

「はい」

渋々と話を聞く態勢をとると、実はなあ、と手を離しながら前置きをして、瀬七が話し始める。

「お前を好きという子がいるという情報を手に入れました。
なんて言っの？ あなた、色恋は久し振りでしょう」

は？

「今はエイプリルフルじゃねえぞ」

四月は四月でも四月十八日。

「いやいや冗談ではないし僕がちゃんと調査して手に入れた情報だから！

ていうかエイプリルフルならもつと凄いの吐くから！

僕の嘘と冗談はこんな物じゃないから！ 来年は覚悟しな！」

やめてくれ。どんな嘘と冗談だよ。

溜息を吐いて、少し考える。

……………つまり、あれだろ。こういうのは

f a v o r i t eとかl i k eとかl o v eとか、そういうこと
だろ？

f a v o r i t eは違うだろうけど。お気に入りじゃないよ。

「知り合いはあまり欲しくないのですが」

「あーそういえば宮本は友達と知り合いは門前払い主義者だったねえ。いやいや、いい話だとは思っよ？」

特にこれといった特徴はないけど、どちらかと言えば可愛い子だし？ ちよつと性格に難有りだけど」

「性格に難の有る知り合いとか彼女は欲しくないのですが」
「敬語止めてください」

むう、と頭の中でその俺を好きとか言う人について考えてみる。

同じクラス？ 違うクラス？ 同学年？ 他学年？ 性格に難有りってどんなだ？ e t c .
俺を好きなんて、そういう話は久し振りすぎて少し考え込んでしまっていた。

そうしている間に時間はどんどん過ぎていく。

「おー、赤石そこは俺の席だぞーい」
「んあーごめーん」

いつの間にかもうすぐチャイムが鳴る時間になっていて、俺の前の席の主が帰ってきた。

楽しそうに間延びした声で瀬七をどーんと押して、俺には一瞥^{いちへつ}もくれずに席に着く。

いつものことだから瀬七はそれを見ても何も言わない。
俺もなんとも思わない。悲しそうな表情はやめてくれ。

同情は、いらなから。

「じゃあ宮本、考えといて」
「……おう」

軽く手を振って自分の席に戻っていく。
手を下ろした後、漫画が下で潰れるのも気にせず俺は机に突っ伏す。

ぐしゃり、という音がした。

やっぱ、友達やら知り合いなんかいらねえ。

心から思った。

赤の追撃

自慢ではないが、俺は勉強ができない。多分クラス中の周知の事実。

定期テストやらマークテストやら、それらのテストの順位は学年でも下から数えていったほうが断然早い。

ひーふーみーよーいつむーななやーこのつとあー。

そんな極端に下の方ではないけれども。

それでも授業中だけは真面目に話を聞いてノートも取っている、つもり。

だから朝の内に何があるうと、本日も真面目くん風に全ての授業を受け続けた。

あーねむい。

そして場面は放課後へと切り替わる。

「あいやー宮本。片付けが終わったら屋上にカムカム」

「おーけーおーけー」

帰る用意のできた瀬七が気たるそうに俺に声をかける。

そしてそのままフラフラと廊下に出て行った。

その後姿を少し眺めつつ、俺ものんびりのんびりのらりくらりと教科書を片付ける。

屋上とか面倒だな、何の話だろう、やっぱあれ？ 告白話？

考えることはたくさんあれど時間は限られているから人間っての

は不幸だね。

鞆を片手に廊下に出てすぐ傍にある、三階と四階を通って屋上へと続く階段を上る。

俺も瀬七も、何の部活にも入ってないものだから、何ものにも咎められることなく階段をどんどん上り続ける。

俺の所属中の教室は二階にあるから屋上は遠い。

普段から運動だけはしているおかげか、しんどくも何事もなく屋上に入るための扉の前に辿り着く。

計94段、お疲れ様でした。

ガチャツとその扉を開けると同時にギィー……という音がする。

古い扉特有のあの音。耳が痛い。

顔を上げ前方を見据えると瀬七の黒い髪が見えた。あと赤い髪。

ん？ 赤い髪？

「おや、宮本。遅かったね。またのんびんぐらりと片付けしてたのかい。まあいいけれど」

見慣れない髪色を見て呆然と立ち尽くしている俺に、座っている瀬七が話しかける。

瀬七の二言三言にハツと我に返ると、再び思考回路を起動させた。

屋上の床って汚くないか。

いや、そうじゃなくって。

よつこらせ、と瀬七がじじいよろしく立ち上がる。
赤い髪の女生徒も立ち上がった。

「ふむ、その呆然とした間抜け面を見たところ鎮西さんを知らない
ようだね。」

紹介するよ。こちら鎮西ちんせい和南香ななかさん。名前くらいは聞いたことある
んでねえの?」

「いや……聞いたことない」

脳をフル回転させて記憶の倉庫を巡っても“鎮西和南香”という
名前は出てこない。

つまり、聞いたことは無いという事であって、俺がどれだけ同
年のやつを知らないんだ、という象徴にもなった。

「おやまあ知らないとは。それで鎮西さん、こっちが宮本龍紀ね」
「初めまして、鎮西です」

その赤い髪の人物は鎮西和南香、という名前らしく一目見ただけ
で染めたんだ、と分かるような茶髪混じりの赤い髪と白い肌が対照
的で映えている。

その肌の色は一見すると、ヨーロッパとかその辺の白人にもとれ
る。

目付きは悪いらしく、俺の方をじろつと見つめてきた。

人によっては嫌われているかのように見える。かもしれない。

俺何もしてねえッス。

貫く刺激

「この人はあれですか。俺のことが好きとか言う人ですか」

そう言った途端、先程後ろ手に閉じていた扉にドン！ とぶつかった。

唐突な出来事で何が起きているかは分からなかったが、腹部に鈍い衝撃を感じる。

痛い、と言だけ発しゆっくり体を起こした。そして瀬七と鎮西のいる方向に目をやる。

「……魔術使うなんて、卑怯じゃないのか」

「高等魔術師ならそんなことお構いなしよ」

そう言って不敵に口元だけを歪めて笑いつつ、しかし、相変わらず剣呑な目つきで俺を睨みながら鎮西がそう呟く。

俺を扉に吹き飛ばしたのは、やはり鎮西のようだった。

んー、魔術使うとは意外だ。多分さっきのは衝撃波だと思う。あれ扱うのは難しいんだけどねえ。さすが高等魔術師。

過去の栄光を思い出さずんばここに光あれ。

自分でも何言っているんだろう。分からない。俺はまだ、高等魔術師だった頃を思い出しているのやら。

……ん？ 魔術？ 師？

「あ」

その時、俺の脳に電流走る。

この方、校内で超有名な高等魔術師さんじゃないか。

あー、思い出した。学年代表挨拶とかでよく見るネ。

うん、うん。成績優秀だけど友人少ない俺の類人やつほい。

しかも同じクラスだった気がするような、しないような。

人間ってのはよくわかんないねー。俺も人間だけど。

いつも見かける顔より、目つき悪すぎの猫みたいだから気付かなかった。

「あはは、ほんとまいんど宮本。君のこと好きなのは鎮西さんではないんだよ。

つかこんな美人に好かれてるとか勘違いすんなバカヤロー」

「バカヤロー」

何やまびこごっこしてんですかお二人とも。

「それじゃあ誰が俺を……その、好きだというんすか。……瀬七、ニヤニヤするな」

俺が一瞬好きとか言うのを躊躇ったせいか、瀬七がニヤニヤしながらこつちを見てくる。やめてくれ。

胡坐あぐらを掻いたまま二人を見上げると、鎮西は言いにくそうに渋りながら話し始めた。

「そのアンタを好きなのは、私の友達よ」

「へえ、その友達是谁で？」

きたがみ ゆりな
「北上百合奈」

「へえ」

知らねえ。

そう言つと今度はつかつかと鎮西が自ら歩み寄つてきて、顔面をグーで殴られた。

なんか口の中で血の味がします。あ、口の中切れた。

もの凄い笑顔で殴つた鎮西は今、気持ち良さそうな笑顔で仁王立ちをしている。威圧感が半端ではない。

あー、でも例えば同じクラスだったら失礼な事したな。
失敗、失敗。

「ビンタがよかった？」

「聞くなら殴るな！！」

起訴裁判

「……っていうか、私と百合奈はあんたたちと同じクラスなんだけど」

うつそ。マジで？　嘘だと言ってくれよ瀬七！

そう思いながら^{すが}縋る様な目で瀬七の方を見ると、腕を組んでうんうんと頷いている。

やっぱり本当だったのかー悪いことしたかもねー。ああ、同じクラスだったネ、ゴメンとか一言謝っとけばよかったかも。

うあーマジかーすんませんー。

そう呟きながら、鎮西の方に向き直って軽くペコリ、と頭を下げてみた。それでも鎮西は不満そうに眉間^{みけん}に皺^{しわ}を寄せている。

何がご不満なんでしょうか、女王様。

そう言うとは今度は足の爪先、もとい靴の先で俺の膝小僧辺りを思いつき蹴ってきた。

なんだろう、俺しし座だけど今日の十二星座占いは最下位だったんだろうか。

「今日の占い第十二位は、ごめんなさい！　しし座のあなた。全ての事で空回り気味。余計な事をするとか相手の怒りを買っちゃうかも？」

お出かけ先では相手に対する言葉と態度に気をつけてね！」

みたいな感じで。ラッキーアイテムは何ですか。

「立ちなさい」

そんなゴミを見るような目で睨みつけられると背筋がぞくぞくしますー。

なんてことはなく、先程の占いに従って黙ったまま素直に立ち上がる。よっこらせ。

うむ、先程鎮西にやられた腹と右足の膝小僧が痛い。

そして立ち上がって再び鎮西を見れば、彼女が案外小柄だということに気がついた。

俺の身長が170？位だから正に平均的。ちなみに瀬七は164？だから少し小さい。

そして鎮西は、おそらく160？くらいだ。

10？って意外と差が大きい、と実感中。しかも鎮西さん細かいから、余計小さく見える。

さつきは威圧感とかオーラのせいでなんか大きく見えなな。

そこで、ふと気づく。

「質問よろしいですか」

「何よ」

コホン、と一息吐いて質問する。

「なんで、初めましてとか言っただんだ？ さっき自分で同じクラスだつて言っただろ」

「あーそれねー。あんたがここに来る前に赤石とちよつと打ち合わせしててね。」

「なんか、あんたつて人の名前とか殆ど覚えてないとかいうし？
ちよつとした実験みたいな感じで試してみたのよ、私たちの事覚えてるかどうか。」

「ま、案の定まったく覚えてないというか、知らなかったようだけどね。百合奈は学級委員長なのに。」

「それで、ちよつとム力ついて殴って蹴って衝撃波ぶつ放した、つてわけ。分かった？」

非常に（理不尽なことがとても）よく分かりました。

そういうことを伝えるため首を縦に一回振る。

もちろん、（ ）の中は伝えない。伝えたら次こそ殺される。

今度は満足したのか、鎮西は眉間に皺は寄せずに次の言葉を紡ぎだす。

「私が赤石に協力してもらつてあんたをここに呼び出した理由は、もう分かつてるわよね」

「そりゃね。その北上のことだろ？ でも付き合えとかお前に言われても無理だ。そういうのは全部断る」

「そんなこと分かつてるわ。そこら辺の事は全て赤石に聞いてるから。」

「あんたの趣味やら家族構成やら苦手な事とか過去話とか、ゼーんぶね。個人情報保護法なんて、知ったこっちゃないわ」

「プライバシーの侵害だ！！」

ビツと人差し指を鎮西のほうに突き出す。それを顔を横に逸らすことで難なく避け、そしてそのままプイッと横を向く。

その指を右奥にいる瀬七に「お前もだ！」と言いながらまた指を突き出すと、へらへらと右手を振ってくる。

「ごめーん宮本。いや、もう炎とか目の前に出されながら脅迫^{おどしおどし}なんかされたらさ、答えるしかないじゃん」

「……………いや、そうかもしれないけどさ。けどな！ そんな状況でも言って良い事と言ったら駄目な事があるだろ！！」

溜息を一つ吐いてから再び鎮西の方に向き直る。

まあ、確かに炎は怖いよな……………うん。かくいう俺も炎引っ提げて脅迫^{おどし}紛いの事をされた事がある。

……………つか、あれやってきたの瀬七じゃん。もうちょつと頑張ったら魔法律裁判所で訴えられるんじゃない？

「話は終わった？」

「いや、ややこしくしたのはお前の発言だからな、絶対」

二足歩行

「そんなことはどうでもいいわ。さっきの話の続き。

それでね、初めっから彼氏になれとか無理強いするつもりは毛頭もないわ」

「それなら俺にどうしろと」

頭上に回り続ける疑問符を浮かべながら鎮西に質問する。

彼氏にさせるつもりはない「関わらなくていい、ってことじゃないのか。」

俺に何をさせるつもりかは知らんがとりあえず反抗心だけ見せとこう。

ヴ……、と鎮西に軽く唸^{うな}ってみると軽く無視された。

ついでに、更に冷たい目で見られる。

「だから、あんたには百合奈の友達になってもらおうと思ったの」「お断りします」

ジュワッ

そう言った瞬間、何かが燃えたような気がした。

次は何だと思いながら全身を見てみると、俺の髪の毛の襟足の部分^{えりあし}が左側だけ襟足の生え際まで燃え尽きていた。

ご丁寧にも直線が入っているように綺麗な焼け目である。

取り敢えず、皆さんそれがどうしたとか思うので、俺の髪の毛講座開講。

俺の髪の毛は男にしては長い。いわゆるロン毛、とか言うやつ。それが肩の辺りまで伸びてるもんだから長いもんだ。女子かっという。

加えて金髪だから、見ようによつてはヤンキーとか悪い人に見えるかも知れない。

そんなこと全くないっすよ。その髪の毛が左側の襟足だけ燃え尽きました。

だから俺の右側だけ隠せば横髪の長いショートカットの男。左側だけ隠せば髪の毛の長いロン毛男とかそんな髪状況になる。まあつまり、とてもカッコ悪い状況になっているのだ。

以上！！

「うっわ、宮本カッコ悪い」

「そんなこと言われんでもわかつとるわい！」

瀬七に蔑むように笑われ、怒鳴りつける。

次に鎮西に向かってギロツと睨み付けてみると、またそっぽを向いていた。

よく見ると肩がフルフルと震えている。瞬間、クスクスと笑い始めた。

「うっわ、ププッ……カッコ悪い」

「ほんともう鎮西さん笑わないでください！　　というか原因またあ

なたあああああ！」

精一杯の怒りをぶつけても鎮西は尚、笑い続けていた。瀬七も然り。

しかも腹を抱えて大笑いしてるもんだから鎮西よりも性質が悪い。まあ、当然殴るよね。というわけで全速力で瀬七に走って近づき、頭を一発殴る。

なんか最近瀬七殴ってばかりだなあ、とか思いつつ更に足の脛すねを軽く蹴ってやった。

「つぬお！　ぐげっ」

奇声を上げながら瀬七が蹲ひづくる。やり過ぎたか。

見上げてみると当然のことながら空が広がっている。トンボの眼鏡がオレンジ眼鏡になるような夕焼け空が広がっていた。

明日は晴れたね、多分。

「これで懲こりたか瀬七。鎮西、さっきの話の続きー」

「ッブ……分かった、分かった」

え？　何で鎮西に怒らないかって？

そりゃ暴力とか怒声上げたら次はどこを燃やされるか分かったもんじゃないからね。無難に生きよう。今日は運が悪いんだ。

一頻ひとしきり楽しそうに笑った後、鎮西はこっちまで歩いてきた。

「まだ友達になるのはお断りする？」

「そりゃまあ。ていうか友達になる理由を教えてください」

「そっか、そこから説明しないと納得しないわよね、この犬は」

犬じゃないっす。せめて二足歩行型の哺乳類でお願いします。

まあ、詰まるところの人間でお願い、という事だが。

そんな事を言っても無駄だと思い、取り敢えず話を聞くことにした。

例外が好

「まず、百合奈はあんたが好きというか、気になっております」
「ほっ」

気になっている、という程度である時点で、好きとかそういう話ではない気がする。

女子ってのは分かんが、気になったら夜も眠れないもんだとは聞いたことがある。

それは好き、ってことで解釈はいいと思うが。

「それで、私がその事に気づいているということ、百合奈はおそらく知らないと思う。そこでね。

友達の機転を利かせてやって、その恋を成就させてやろうという友達の思いやりが、今回の呼び出しに繋がってるの。

ただ、そこで問題点が発生するわ。

何しろ私と百合奈は、あんたと一切の接点がないから、その考えがそれ以降発展しないということに気づいたの」

「クラスメイトなんだから普通に話しかけりゃいいんじゃないかったのか？」

鎮西はそこで首を横に振って否定する。

「それがね、百合奈の恋心に私が気づいたのは昨日今日の話じゃない。学年の上がるそれ以前、半年前からだった。

百合奈が、あんたの事を何時から好きだったのかは、私の知る所じゃないけど多分、何年も前から好きだったんじゃないかしらね」

片思いつてのは長ければ長いほどその恋焦がれる気持ちが強まるらしい。北上も、例外ではなかったんだろう、

当時は親友とは言えない程度に仲の良かった鎮西ですら、何となく気づいたという。

恋愛事に関してはワクワクするのは鎮西もらしく、北上の恋がすんなり叶うように少し前から北上にはばれないよう、こそこそと準備していたらしい。

そこだけ聞いたらただの友達思いか、ただのお節介のように聞こえる。

でもいいやつなんだろう。しかし鎮西は大きく溜息を吐いた。

「けどまあ、百合奈ったら当時から何時まで経っても、告白する様子が見られなくてねー。それで、数ヶ月前にちよつとした実行に移ったの」

その実行とやらが、俺と唯一親しい瀬七に干渉することだったらしい。

何でも、俺の情報を確実に手に入れるため先程瀬七が言っていたように、脅迫紛いの事をして親しくなったとか。

俺としては迷惑極まりないが、鎮西としては必死だったそうだ。脅迫紛いの事をされても仲良くなれるとは。瀬七の懐の深さというか、腹の黒さで息が合ったんだろう。

それはさておき、美しい友情だと感心した。

それから色々とやっている内に細かいことが面倒くさくなり、今回のような実行に移ったらしい。

「飽きつぽいんだな」

「だって何やつても実にならないのよ!? じれったいっただらありやしないわよ」

半年なんて長い長いー、と言いながら手を横に振る。
しかし、やっぱり鎮西の行動に違和感を覚えた。

「けどさ、そんなこと俺に伝えてどうすんだよ。そんな事言われても、逆に強く拒否することしかできねえ」

「ああ、そのことは私も思ったわ。でもね、そこを利用するの」

無理展開

「つまりね、友達になってもらって百合奈の良い部分見せ付けて、あんたに百合奈を好きになってもらおうという魂胆よ」

「自分で魂胆とか言ったよこの人」

「事実だわ。そんなの偽っても仕方がない」

「そんな無理矢理なラブコメ的展開なんか聞いたことねえよ」

大体こういうのは、鎮西が俺に何も知らせないまま友達になって、そこから北上と自然にくっつけさせる。とか、そんな展開なら理解できる。

もう一回言うが、どこでも聞いたことねえよこんな展開。

「あんたが想像したような、じれったい何時成就いつじょうじゆできるか分からない行動よりもこっちの方が成果もちゃんと目に見えるし、地に足が付いた感じでいいじゃない」

「俺の考えが見透かされている、だと……！？」

ゆっくりと太極拳の構えをとって、カツと鎮西に言い放つ。

また冷たい絶対零度の視線を頂戴するかと思いきや、今度は、蔑むような視線を頂戴し、ハンツと鼻で笑われた。

取り敢えず姿勢を元に戻し、土下座しながらすいませんでした、と謝る。

「何で土下座するの。みつともないわ、宮本」

「おおつ、名前呼んだ」

「そこかよ、おい」

出会ってから初めて名前を呼ばれ、驚いて顔を上げると若干引いている鎮西の顔があった。

さつきから空気状態だった瀬七が何時の間にか俺の後ろにしゃがんでいて、短くなっていない右側の髪をちよろちよろと弄^{いじ}っている。

「まあ、そんなわけで明日からよろしくね二人とも。ご協力お願いするわ。拒否しても魔術で従わせることができるんだから。そんな面倒なことされる前に自主的によろしくねー」

そう言って手を振りながら魔術で扉をガン！ と開けて屋上から出て行く。

理不尽なことばっか言うやつだなー、とは思っていたがここまでとは思っていなかった。

人権とかガン無視だ。人権？ 個人的人権の尊重？ 尊い一人一人の権利？ ハ？ 何スか、それ。
そんな感じた。

「……なあ瀬七、どうするよ」

まだ髪を弄っている瀬七に話しかける。

「そうだねえ……」

手を止めて瀬七が立ち上がった。

「取り敢えず、髪を切ろうか」

そうだな、と言って俺も立ち上がる。

制服に付いている土埃^{つちほこ}を掃^はい、開けっ放しになっているドアに向かって歩き出した。

早朝が嘘

今朝は休日だと言うのに6時30分に目が覚めた。

いつもなら、平日でも7時30分に目が覚めて慌てて学校に行くという毎日毎日飽きないドラマタ劇を自分にだけ披露しているというのに

休日になってこの早起きという快挙っぷり。誰か賞状してくれないものか。がんばったで賞、みたいな感じで。

いや、もうありえないぜーとか言いながら、今日は何かあったのかと思いベッドの傍にある小さな台の上に置いてある

月捲り式の小さいカレンダーを掴んで、じーっと睨みつけるように今日の日付を探す。

しかし、そこで今日が何日かを知らないのに気づき、のっそりとベッドから這い出してベッドの前に配置されている、勉強机の上にある水色の携帯電話をまたぐわし、と右手で掴む。

そして横にあるボタンを押して今日の日付を確認すした。

携帯電話の光が、寝起きのあたしの目には眩しいけれど極度の近眼のせいでよく見えないから、それでも顔に近づけてよく見てみる。

「おー、しがつはつかーどよーびー……」

そう呟いて携帯電話を掴んだままベッドに向かってダイブする。ベッドのスプリングがギィギィいつているけれど、あたしは何処でも寝れるから寝心地が悪くても問題ない。

むしろ快適になつてるかも。

しかしうつ伏せになるようにダイブしたので、鼻を打ったのかやけに鼻が痛い。

ちきしょー……と言いながら、左手をゆっくり伸ばしてまたカレンダーを掴む。

左に顔を向けて20日を探してみると、そこには青い蛍光ペンで“AM7:00 補習”と書いてあった。

「あ、やば」

そこで完璧に目が覚めて、今度は急いでベッドから跳ね起きた。まだ痛む鼻を押さえながらカレンダーだけをベッドに放り投げて一階にある洗面所に向かって猛ダッシュする。

慌しい、朝。

爽快視界

「取り敢えず顔洗って着替えて準備して……のわつぶ、へ」

ぶつぶつ予定を呟きながら階段をタンタンタン、と駆け下りていくと

足を滑らせて、ずでででと変な格好のまま階段を滑り降りてしまった。

「……つつ……う……！」

頭を押さえながらゆっくりと立ち上がる。肘のあのぶつけたら痛い所も思いきりぶつけてしまったようだ。

それも押さえつつふらふらしながら洗面所に向かい、取り敢えず顔を冷水でバシャバシャと水を辺りに飛び散らしながら洗う。

そのあと1DAYのコンタクトを慎重に、そつと人指し指で目に入れた。

今日はすんなりと目に痛みもなく入ったみたいで、なんだか嬉しい。朝からぼやけていた視界が鮮明になり、気分がすっきりとする。肩より少し下まである金色の髪をゆっくりと櫛で梳かし、黒い髪ゴムで二つに結う。そして両耳には水色のピアスを一つずつ付けた。ピアスは付けていても校則違反にならないので、本当にありがたい。装飾品の一つでも身に付いていないと、なんだか落ち着かない。

余談かもしれないけれど、あたしの髪は、金色一色ではない。頭頂部の髪の色だけ、こげ茶色に染まっているのだ。

まあ、そんなプリンみたいな色層にしたのは、趣味なのでご了承を！

また階段を駆け上がり、クローゼットのある部屋に行き制服を引っ張り出す。

あたしの通う学校は、男女とも冬夏通して似たような制服で、冬服は白ブラウスに濃紺のブレザーもしくは各自で好きな色のセーター。

指定セーターが無いので楽。そして女子は黒い布地に白いラインが一つあるスカート。男子は上は女子のそれに黒いズボンの組み合わせ。

リボンとネクタイはどちらも赤色で、靴下は黒。こんな感じの一般的な制服。

中学生の時のセーラー服よりは可愛いからマシかな？　と思う。

夏服はブレザーが無くなってブラウスが半袖になっただけ。もしくは、ベストとか自由に着てもいい。

リボンとネクタイは基本付けるけれど、付けなくても怒られないからあたしは付けていない。

本当に自由な制服スタイル。どうせなら私服にしてくれっと思うけど制服じゃなくなったら何年ですかアナター、みたいな感じになるよねー。それはそれで面白いと思うけど。

そうこうしている内に制服に着替え終わった。部屋に戻って通学鞆に必要な物だけを放り込む。

現在時刻AM6:47。携帯電話も鞆に放り込んで、準備完了。本当に急げばこんなに早く準備ができると知って、感心。

滑り落ちないように階段を急いで降りて、鍵を持って玄関に向かう。

一軒家の割に靴は二、三足しかない玄関で指定のローファーを履いて立ち上がる。

家を出る際に「いってきます」と言った。

あたしの他に、この家にはもう誰もいないというのに。

盲目抱擁

こんな事を言つと親が死んで一人暮らしをしてる学生っぽいけれど、実際、そうではなかったりする。嘔吐いてごめんね？

親、現在進行形で生きてます。超若い。バリバリ。

あたし、一条萌いちじょうもえはあの家族にとって所謂いわゆる、いない存在だった。育児放棄とか虐待とか、そういう物は無かったけれど子供の勘つてのは鋭いらしくなんとなく気づいた。

ああ、この子産まなきゃよかった、っていう両親のあたしを煙たがるような視線に。

気づけば両親はこの小さな二階建ての一軒家を建てて、あたしに生活させている。

やだねえお金持ちは。何でもかんでもマネーで解決させようとするんだから。

初めこそ悲しかったけれど、この生活も5年目。もう慣れてしまった。

料理は未だに下手だけどこのご時世には、コンビニエンスストアという名の文明発達の証的な物がそこらにあるから特に困っていない。

生活資金も定期的に送られてくるから、結構自由な生活っぷり。自由だー、イエー！　みたいな感じで取り敢えず叫んどこう。

「イエー」

そう言つて鍵を閉める。ご飯を食べてないからお腹が空いて死に

そうだけど、わき目も振らずに道路を駆け出す。

「ご近所さんとかまだ誰も出てきていないけれど、車は相変わらず走っているから邪魔にならないよう端の歩道を全速力で駆ける。

運動はできるけれど1kmを全速力で走るのは大変で、途中で息切れした。それからは歩いて学校に向かう。

学校の正門に到着した時、7時のチャイムが鳴り響き慌てて再び駆け出した。

校内にあまり人がいないのを不審に思いながら三階まで駆け上がる。痛む脇腹を押さえながら教室の戸をガラッと、思いつき開けた。

勢い余って戸が横に思いつきりぶつかって、バアン！と音が鳴る。その瞬間、教室にいるクラスメイトが全員こっちを向いた。

「あれ？」

教室の中には、まだ二、三人くらいの女子しかいなかった。

教室前方の壁に掛かっている時計を見ると、現在時刻AM7:06。とつくに補習が始まっているはずの時間。

けれど、教室にいるのは二、三人。

彼女たちに視線を向けると、皆不審な目をしてこっちを見ていた。全員、真面目な子ばかりであたしと親しい子は一人もない。

普段不真面目とか、そう評されているあたしが息切れして急いで入って来たから変な目で見られているんだろうけど、とても居心地が悪い。

「見んじゃねーよー、という意味を持たせた視線で彼女たちを見ればさっと視線を逸らされる。なんだこの子ら。」

「ももちゃんー!!」 がばっ
「どあつぷ」

後ろから何者かに思いつきり抱きつかれ、思わずつんのめる。

「ちょっと、じいね琴音……痛い……」
「あ、ごめーん」

抱きついてきた人物、友達ともだちの黒崎琴音がパツと離れた。
えへへー、と笑いながらあたしの前に回りこみ、また抱きついてくる。

琴音は身長が低く、それに対してあたしはそこそこ高いので彼女の腕があたしの胸の下に回りつく感じになる。
キラキラ目を輝かしてあたしを見上げてきた。琴音の眩しさに、少し目を細める。

「おはよー、ももちゃん」
「うん、おはよ琴音。今日はえらく機嫌がいいねー」
「あ、わかるー？ 朝からももちゃん見つけたから嬉しくってー」

ももちゃん、というのはあたしのあだ名だ。
どうやら琴音はあだ名をつけるのが好きらしく、何にでもあだ名を付ける。

物にも名前を付けていて、この前は愛用の携帯電話をべていちゃん、と呼んでいた。

少し子供っぽい所がある、あたしの大事な友達。

うへへ、と琴音が変な笑い声を上げた。そんな琴音をさながら相撲もちうのように押しつつ自分の席に向かう。

心は誓約

「ねねね、何で今日ももちゃん早いの？　なんでなんで？」
「ちよつと落ちつこつかー、琴音」

へい待ちなガールー、とふざけ合いながらあたしの席に辿り着いた。

そして、琴音を引っぺがして自分の席に座る。琴音も自身の席に着く。琴音は後ろの席だからあたしが後ろに振り向いて話し出す。

「何でももちゃん今日早いのー？」

「早起きしたから以外に他ならぬのよー、琴音。それより、今日の補習って7時からじゃなかったの？」

「えー違うよー早すぎるじゃん。今日は7時45分からだよ」

なるほど、カレンダーに書いた予定を間違っていたらしい。

いつもは普段の学校と同じ8時55分からだけど今日は、教師の集まりがうんたらかんたらで時間が変わる、と担任が先週言っていたことを思い出す。

早いつて、7時45分は。

それより何であたしは書き間違えたんだー。心の中で絶賛後悔中。朝の慌てっぷりが記憶のDVDに録画されていて頭の中で再生されている。正しく書いとけば30分後に出ても問題なかったのに。

「今日早いのはねー、早起きもあるけど時間を覚え間違えてたの」
「そーなんだー、ももちゃんあわてんぼうさんだねえ。」

琴音もね、今日は早起しちゃって予定より早い電車で来たの。
いつもと違う時間だから困っちゃうよねー」
「そーねー」

語尾をゆるゆる延ばしてのんびり会話する。

いつももう少し早く来たら、こんな風に会話できるかなー、とか
思い普段の起床時間を改善しようと思案中。どうせ改善されないだ
ろうけど。

琴音は電車通で、隣の市からこの学校に通っている。だから、琴
音とはこの学校に通い始めてから友達になった。

今ではすっかり仲良しになっていて、親友の内の一人になっている。
る。

「愛してるよー、琴音ー」

「えー、ほんとにー？　ありがとー」

こんな風に冗談を言っても可愛く返してくれるから、可愛いかぎ
り。多分琴音は、今が可愛い盛りだと思う。

ニコニコといつも笑っていて、大きくてつぶらな瞳をいつもパチ
パチと瞬かせている。

琴音の亜麻色で長い髪は、本当に綺麗。下ろしているため風が吹
くとサラサラと揺れる長い髪は、透き通って見えて、本当に綺麗。

こんなにも綺麗で、しかも染めていないなんて。黒髪からプリン
色層に染めたあたしとは大違いだ。

腰まで届くその長い髪は、染めたせいで所々痛んでいるあたしの
髪とは大違いで、少しも痛んでいない。

そのおかげで、普通の茶髪の子よりも3割り増しで綺麗に見える
という、なんてお得な補正。

黒髪が嫌だから染めたただけなのに、なんというあたしの髪の汚さ。

「あれ、今日のももちゃんすっぴんぴんだね。マスカラもしてないよー」

「ああ……急いで来ちゃったから、ご飯も食べてないしメイクもしてないねー」

「ふふーでも可愛いー。すっぴんももちゃん久し振りだけどメイクなんかしなくなつて、十分美人だよ。うらやまーしー」

そう言つて琴音があたしの顔をじつと見つめる。

琴音や皆はあたしの顔を超可愛いー、だとか美人ーとか言うけど、あたしはこの顔が超可愛いとは思わない。

そりゃまあ、人並み以上にはモテたり告白されるけど、性格で言えば琴音の方が良くて

顔なら二年生で一番美人とか言われている赤い髪の子の方が、絶対良いと思っている。少なくともあたしよりは。

まあそんな顔だから告白されるのにも飽きて、去年彼氏を作ったからそんなに玉砕確定の告白をされることも少なくなった。

はつきり言つてとても迷惑で、不快度指数は120%越えだった。顔が良いからって言い寄ってくるような人に、あたしは興味が無い。今の彼がどうなのか、と言われると恥ずかしいから以下略。

「ももちゃんはねー、三年生、ううんこの学校でいっつちばん可愛いの！」

でもメイクしたらもっと可愛いの！　というわけで、この琴音がももちゃんに琴音流メイクをお顔にほどこしてあげましょー」

「いや、あなた今メイク道具持っていないじゃない。どうやってやるのよ」

「それはー……魔術ー。　それー！」

それー、と琴音が言つと同時に掌をあたしの顔の前に開いて横に

さつと振る。その時、なんだか暖かい風が吹いた。

手を下ろした琴音が鞆を開きピンクの置き鏡を取り出して、あたしの前の机に置く。

「いかがでしょーか」

「おー、新鮮だね。ありがとう」

「どういたしましてー」

そこにはナチュラルだけれど、しっかりとメイクされたあたしの顔があった。

そのメイクは、あたしがしたことないものだから仕方はよく分からないけれど、なんだか気に入った。

後でこのメイクの仕方を教えてもらおう。と心に誓う。

喧嘩上戸

「うふふー、かーわーいーいー。ぬ、あやや来たよーももちゃん」

そう言って、後ろの扉から教室に入ってきた友達の**高坂あや**に向かつて、琴音が右手を大きく上に上げてぶんぶんと振る。

あやも苦笑いしながら片手を小さく上げた。

あやや、というのはあやのあだ名だ。……何処かで聞いたことある、とかいうのなしの方向でよろしく。

遅いー、と琴音が言いながら今度はあやに抱きつきに行った。

抱きつき魔だなー、と思った。あたしも琴音に会ったら1回は抱きつかれる。

そんな抱きつき魔・琴音の頭を撫でながらあやがこっちに近づいてきた。

「おはよう一条。今日は早いんだな」

「まーね。珍しいでしょ」

そうだな、とあやが言っただけと同じ様に琴音を引っぱがして席に座らせる。

あやは少々男勝りな性格で、だなどかゝだろ、みたいな男らしい口調で喋る。

肩甲骨辺りまで伸びた黒い髪をポニーテールにしている、正に日本人ー、みたいな見た目。だけど口調は男らしいから、少しだけミスマッチ。

身長も170cmと、女子にしては長身でカッコいい。身長分け

てください。

「琴音と一緒に来たんじゃないの？ いつも一緒に登校してるらしいけど」

「いや、一緒に登校はしたんだが生徒会室に用事があって、少し寄ってきたんだ」

「琴音は待とうと思ったのに先に行け、って言われちゃったのー」

琴音がぶーっと拗ねてあやがすまん、と宥めるいつもの光景。そこであたしは干渉せずに二人をにこやかに眺める。

これがあたしたちの会話の光景。いつも三人で行動しているからあたしたちを見かけたら、大体この光景が見られると思いますです。生徒会室に用事、というのはあやは凄い事に生徒会の副会長だから、多分生徒会室に忘れ物とか、生徒会長に用事とかあったんだと思う。

突然お腹がくう、となった。

途端に顔が熱くなり、まだ目の前に置いてある鏡を見てみるとほんのりと頬が赤くなっていた。これは恥ずかしさの赤。

二人に気づかれていないかと様子を見てみると、まだキャツキャツと話していて少しだけ安心する。

脇腹を強く押すとお腹が鳴らない、と聞いたことがあるから隠れるようにこそそそと、ぎゅーっと親指で脇腹を押してみる。

それでもお腹が膨れるわけもなく、恥ずかしながら何か持っていないか二人に尋ねてみることにした。

腹が減っては戦ができぬ、とはこの事ですか。違っただろうけど。

「だからね！ あややはいつも琴音に冷たいのー！」

「そんなことないぞ。いつも甘やかしてあげてるじゃないか」

「琴音、甘やかされてないもん子供じゃないもん！ ていうか、甘やかして“あげてる”って、何それー！？」

いや、話しかけようと思ったんですけどね、更にヒートアップしてるんです。

琴音がキーって言って、あやに噛み付く。食ってかかる、という意味で。この二人、幼馴染らしいけど本当に仲が良いのか怪しくなってきた。

傍から、というかあたしから見たらお母さんと子供が喧嘩してるみたいに見えて、少し面白い。

「はい、ストロップ」

そんな二人を仲裁するのもあたしの役目。琴音の小さな後ろ頭を軽くチョップする。

「琴音、言いすぎだよ」

「ももちゃんはややの味方なのー……」

「そうじゃない。皆で仲良くしようって、そういうだけだよ。はい、仲直り」

「むー……ごめんねーあややー」

「こつちこそ、すまないな」

琴音がしょぼんとした雰囲気のまま頭を下げて、あやがその頭をまた撫でる。

うへへー、と琴音がまた変な笑い声を上げた。けど、その顔は幸せそう。やっぱりあやの言う通り、琴音は甘やかされていた。

食欲増減

「そういえば、電車に乗る前にコンビニに入ってきたんだが少しパンを買いすぎたんだ。二人とも食べないか？」

あやがそう言っただけから六個パンを取り出して、琴音の机の上に並べる。

気になるラインナップは、気軽に食べられる、と今流行のランチパックが3つに、アップルパイが2つにメロンパンが1つだった。

あたしから何かない？ と聞こうとしたのに向こうから出てくるとは。

まさに、棚からばた餅という感じ。よく食べるあやに感謝。ちなみにあたしは少食。

「自分が食べる分だけ買えばよかったのに」

そう言いながらも心の中では嬉しくて仕方がない。

これちようだい、と言いながらランチパックのNew! と書いてあるシールを貼っているやつを指差す。

ん、と言いながらあやがあたしの方にポンスと投げってくれた。

よく見てみると何とかミルクと書いてあって、とても甘そう。

袋をバリッと開けて一口食べてみると、案の定甘かった。というか甘すぎる。少し吐きそうになりながら、黙々と食べ続けた。

「んー、あまあまー」

あたしと同じパンを食べている琴音が、幸せそうな顔でパンを頬

張っている。

あやはアップルパイを食べながら、そろそろとやって来るクラスメイトに欲しがられるパンを投げながら、投げ返ってくるお菓子を鞆に入れていた。

教室内でお菓子が飛び交っている、という非常にありそうでない光景。これをシュールって言うのかな。

あっという間にパンは完売。あたしも食べ終わったパンの袋を滓が出ないよう、丁寧に折り畳んで鞆の中に入れる。

口の中に残っている嫌な感じに粘っこい味を、琴音が飲んでいたお茶を貰って口直しをする。うえー、気持ち悪かった。今度からミルクのパンはお断り。

その後もだらだら雑談していたらチャイムが鳴って、教師が入ってきた。

さあ、面倒くさい学校の始まり始まりー。

補習なんて関係なくて、あたしの頭の中は帰ったら何かをするかでいっぱいだ。

鮮明断髪

髪のを切ったら失恋した証。

そう考えるのは漫画の読みすぎとか、メルヘンチックな乙女なんだろうけど。

じゃあ、男の場合はどうなんだろう。女子のように肩まであった髪のをばっさりと切って、うなじが見え隠れするような長さになった。

「切りすぎじゃね？」

「そうでもないよ」

俺たちはあれから一旦教室に戻り、運良く鍵のかかっていない教室の中で髪を切っていた。

というか、俺が瀬七に髪を切られている。

理由は単純明快。鎮西に奇妙な髪型にさせられたから。

あれから帰ろうとはしたけれど、この髪型のまま帰って道行く人に注目されるのは嫌だ、というわけで髪を切り慣れている瀬七にちまちまと髪を切り揃えてもらっているのだ。

なぜ髪を切り慣れているか、というと俺は知らないわけだけどぺちやくちやと楽しそうに話しながらジャキンジャキン、シャキンシヤキンと切っている。

そのぶんにはああ、慣れているんだなと納得。

耳元で鋏が髪を切ったり空気を切ったりする音が聞こえる。

それが交互に聞こえるもんだからなんだか眠くなってくる。

眠気を吹き飛ばすように頭を軽く振ると、ぎゃ、と瀬七が言っ

頭を抑えてきた。

「動くなよー宮本」

「おーごめん」

乾いた笑い声を一つ上げ、少しだけ姿勢を正して前を見据える。
普通に俺の席に座っているから、前方には本とか置いてある棚があるわけで、右斜め前にはでかい黒板が、でーんと構えている。

目線だけを下に向けると俺の髪の毛が少し散らばっていて、左にある窓から差し込む夕日でキラキラと少しだけ光っていた。

地毛だからねー、綺麗だねー。

* * * * *

「よし、終わったよー」

ポン、と背中を叩かれてハッとした。

あれから何時の間にか眠ってしまったみたいで、時計の長針が3から5に移動している。

床下にある俺の髪の毛さっきより量が増えていて、時間が経っていることを証明していた。

「気に入らない部分があるかもしれないから、鏡見てきな」

瀬七が俺の肩にかけていたタオルを除けて、首筋を払ってくれる。

言われるがままに廊下へ出て行き、水道にある鏡の前に立つ。

鏡を覗き込んでみると、いつもと何か違う俺の顔があった。

「髪が短いから当然か」

自分でノリツツコミ、自問自答をして顔を横に向けたりして全体的にどう変わったか見てみる。

肩まであった髪の毛が一気に短くなったから違和感が満載で、恥ずかしい。

でも何を間違ったのか、以前はセミロング風の女子みたいな髪型だったのに、今はショートカットの女子みたいな髪型になっている。頭をわしわしと掻いて少しだけぼさぼさにしてみる。

でもサラサラとした髪質のせいで、少し撫でたらすぐに元に戻ってしまった。

髪形を少しだけ変えるのを諦めて、瀬七の待つ教室に戻る。

彼氏彼女

「気にいったかい？」

「じょーじょー」

教室に戻ると瀬七が床に散らばっている髪を箒で掻き集めていた。それに習えとばかりに掃除用具箱からちりとりを出して、髪の毛が集まるのを待つ。

新聞敷けばよかったなー、と思いながら、ここには新聞が無いのでその後悔の念は、抹消。

瀬七が髪の毛を集め終わり、俺の持っていたちりとりに入れる。それを持つて教室前方にあるゴミ箱に入れようとするが、いったん休止。

「……あのさ、瀬七。ここに入れたら朝大量の髪の毛がゴミ箱に！？　みたいな感じで、騒ぎになるんじゃないか？」

「そだねー……じゃあ、食べる？」

「なんでだよ！」

もう変な返事する瀬七嫌だ！！

考えるのも馬鹿馬鹿しくなったから、ちりとりごとゴミ箱へ放り投げる。

ガコン、と音を出しながらゴミ箱の中にちりとりが綺麗に納まる。それを無視して席に戻った。……ちりとりを戻せて？　汚いから無理無理。

「はは、不良だ」

「うるっせえ」

机の上に置いてあつた鞆を掴み、瀬七を置いて教室から出て行く。ちよつと待てー！　みたいな声が聞こえた気がするけど、無視。階段を下りようとしたところで、瀬七が追いついてきて隣に並んできた。

「お前は彼女か！」

「ちげーよ！」

「だったら隣に並ぶな！」

「いーじゃんどうせ行き先同じだし！」

ぎゃあぎゃああと叫び合い、騒ぎながら校舎から出て校門を出る。

徒歩の想

校外に出ると騒いでいると人目も憚られ、自然と言い争いも納まる。

今日の夕飯何にしよう、とか課題めんどー週末課題めんどー、みたいなの。

他愛もない事を考えながら瀬七と会話しつつ、のろのろと帰る。

「じゃ、またな」

5分も歩かないうちに瀬七と別れる。

さつさと帰ろうとする瀬七を、なんとなく引き止めた。

「なんだい？」

「あー……あのさあ、俺、どうしたらいいと思う？」

「何が？ 課題？」

「ちがわい。鎮西の事だよ」

ああ、と瀬七が納得したように頷いた。

今日は木曜日。明日は必然的に金曜日だから、教室で鎮西に会っ
いや、その前に本当に鎮西と北上っていうやつがいるのか、確認
しなければいけない。

クラスのやつの名前を覚えているか指を折りながら考えていたら、
両手で足りた。

自分で考えていて空しくなったが、クラスに何人いるかが分
からない。取り敢えず、その十人がクラスメイトってことにしよう。

「やってみるだけの価値はあると思うよ。そりゃあ君が納得しきつ

ていないのは、分かっているけれどね。

上手くいけば友達ゲット彼女ゲットー、みたいな感じで一石二鳥じゃないか」

「そういうけどさあ……」

「僕もこの件には関わっているんだから、たまには相談に乗るよ。頑張れよー宮本。応援してるから」

じゃ、と言って手を振りそのまま瀬七が小走りで帰っていく。

どこまでも我関せず、みたいな態度をとるから何時まで経っても掴み難い。

それが瀬七なんだけど。

いや、それは個性でいいと思うけれど、もうちょっと親身になって考えてくれないか、と思う。

仮にも親友なんだしさあ。

とぼとぼと歩いている内に家に辿り着いた。

俺の家はどこにでもあるような普通の一軒家で、茶色の塗装をしている。

それに加えて小さな庭と駐車場があるから、まさに一般家庭。

ガチャガチャと鍵を開けて家の扉を開け、ただいまー、と家の中にいるであろう人物に向け言う。

「ただいまー……あ？」

俺の視線は玄関から上がり廊下になっている場所に注がれる。

そこには、人が倒れていた。

几帳は面

「何やってんだ……」

倒れていたのは、五歳年上の姉だった。

俺とは違う、金色ではなくて綺麗な紫色の髪をしているが、今はうつ伏せになり、髪を振り乱したように廊下に広がっている。

姉の髪は長く、ひどく邪魔だ。

一先ず靴を脱ぎ、髪を踏まないように手で摘み上げる。

しかし、ここで予想外の展開。その髪の毛は姉のぼつさりと切られた髪の毛だった。故に、髪をぐつと持ち上げても姉が痛がることもない。

今日は厄日とかじゃなくて、断髪デーなんじゃないかと一瞬思った。

「おい……おい！」

肩を揺すって姉を起こそうと試みる。

軽く揺すっても起きず、姉の体が揺れるほど揺するとようやく起きた。

百年の眠りから覚めたように顔をのっそりと上げ、右手で目を擦る。

「……おーおーは」

「何やってんだよ」

「えーびーぞーりー」

は？　と言うと言葉通り姉がえびぞりをした。

お前それは無理があるだろー、みたいに変なえびぞりではなく手を使わずに足と頭が付いている、綺麗なえびぞりだった。

綺麗なえびぞり、というのは俺もよく分かんが取り敢えず、綺麗なうつ伏せブリッジ、みたいなイメージでいいと思う。

それから姉はなぜか腹でジャンプし、高く飛び跳ねる。

ジャンプするといびぞりの体勢を崩し、綺麗に両足で着地する。

飛び跳ねると同時に髪の毛も一緒に上に飛んでしまい、ワントン水遅れて髪の毛も地面に落下。

「お見事」

「でしょー」

「ところで」

「はい」

「これは」

「なんでしょーかつ」

「髪の毛だ」

「せーかいっ」

まったく感情がこもっていない拍手をぺちぺちと送られる。

1ミリも嬉しくなかなかった。

出来の悪い姉を持つと弟は苦勞する、とはよく言ったものでその言葉の意味を俺は今、よく理解した。

今までだってこういう面倒なこともあったが、その度に親父か母さんが説教していたから、何とかなっていたようなものだ。

だが来週まで、二人とも仕事の都合で帰ってこない。

その間俺はこの引きこもりの姉を世話しなければいけないのだ。

しっ
かりしろ、
俺。

姉の物臭

「片付けてください」

姉の拍手に対抗するように、俺も一回パンツ！と手を叩き空気を変えた。

姉はぶつぶつ言いながらしゃがみ、自分の長かった髪の毛を手で摘んでは自分の脇に積み上げている。

髪の毛の量自体は少ないのに一本一本は鬱陶しいほどに長いから、すぐに小山ができる。

しかし姉の行動はのろのろしたもので、遅い。大半は途中から手伝った俺の成果だ。

先ほども言った通り、俺の姉は引きこもりだ。ニート、とも言える。

なぜ姉が引きこもりなのか、ということ俺は知らない。

けれど俺が記憶している限りでは、俺が小学六年生、姉が高校二年生の頃から引きこもりだ。

つまり俺たちの年の差5年前から殆ど引きこもっている、というわけ。

姉がそれだという事に気付いたのは中学生になった頃で、その時には、姉は既に高校を中退していて、家籠りの準備が万全だった。それからは殆ど家から出ず、外に出ることが週に一回位なのが普通になった。

何年か前、姉に家で普段何をしているのか、と聞くと超健康的な答えが返ってきた。

まず、6時起床。この時点で健康。

俺が起きるのは大体平日でも7時でそれからパツと準備をして登校している。

しかし姉は違う。

起きた後は、部屋に備え付けの地デジ対応済みのテレビでニュースを見て6時半になったら番組を変え、朝の体操を2番までしっかりやっているらしい。

朝の体操とか懐かしすぎてどんなのかは忘れたから、今度一緒にやってみよう。

朝の体操が終わると次は柔軟体操をずっと言っていた。

それから一階に下りて、朝食を自分で用意して食べている。

用意、といっても姉は壊滅的に料理ができないから、少し焦げている焼いた食パンを食べ、牛乳をコップ一杯だけ飲むだけなのだが。

しかし、健康的なのはここまでだ。

この後姉は昼食もとらず、俺が帰ってくるまでずっとテレビを見ているか、ゲームをしている。

姉は細身でとても痩せているが、高校生男子以上によく食べる。

大人、だからね。

朝は食欲が無いからあんな簡素な朝食なんだ、と言うが単に料理ができないだけだろうが。ふざけんじやないよ。

昼食もとらず、お菓子もアイスも食べない姉は、空腹で家の中でぶっ倒れていることが多い。

帰ってきたら殺人現場跡、みたいなことがあるから何とか姉に料理を教えようとしたことはある。

しかし無駄だった。

何か一つ教える度にその前のことを綺麗さっぱり忘れる、という

大変素晴らしい記憶能力を持っていたからだ。

その姉のおかげ、というわけではないが俺はそこそ料理とか家事が得意な高校生男子と化していた。なんとも嘆かわしい事態だ。

そんなこんなで5年の年月が過ぎ、今に到る。

因みに夜はヨガして、俺が太極拳の構えと一緒にとってから夜中の2時頃に寝ているらしい。

らしい、というのは、俺が最後まで一緒に太極拳なんざやっているわけではないからだ。

しかし、こんな時間に寝て6時に起きられるのだから羨ましい。

さて、皆さん。

どうして、先ほどのえびぞり腹這いジャンプを、ニートで引きこもりの姉ができるのか。

お分かりいただけただろうか。

日頃の体操とか簡単な筋力トレーニングをしている姉はなぜか、超人的な身体能力を手に入れていたからだ。

俺は姉の身体能力に関しては興味が無いが、姉がどれくらい体が柔らかいのかは見てみたい。

もしも人類を凌駕りょうがしているとしたら、恐ろしい。

好きは弟

「終わったよー」

俺が少し物思いに耽^{ふけ}っていると、いつの間にか姉が髪を集め終わっていた。

床屋じゃないから髪の毛を捨てる用のゴミ箱が壁にあるわけもなく、ゴミ袋を持ってきてその中にどさどさと入れていく。ヘイ大量だぜ。

「そういえばさ」

「んー？」

摘みにくい一本一本の髪を、長い爪で器用に摘んでいる姉に問いかける。

「何で髪切ったんだ？　そしてなぜ倒れてたんだ」

「倒れてたのはー何時ものアレとしてー」

「空腹でぶっ倒れるのが日常になっちゃいかん」

「だまれー小僧」

頭に拳骨を一発おみまいされる。

ゴッ、という音がして甲のあの骨の部分が当たったのが分かった。非常に痛い。

「いってんだよ」

「だまらっしゃい。それで髪を切ったのはー邪魔だったからに過ぎ

ないよー。

気分的にここで切ってたけど何時ものアレでぶっ倒れちゃったのです。切りすぎたのはー最初にザクツといったらここで切っちゃってー」

あははー、と能天気そうな笑い声を上げて姉が自分の髪を指す。姉の髪は俺よりも短くて、ベリーショート、とかいうやつだった。見ようによつては男子でもいけるかもしれない。ほら、今流行のドラマとか。

俺は見えてないが、姉がたまに録画して見ているのを発見したことがある。

発見、とか言うと姉が未確認の動物みたいだが、もう珍獣扱いしているので多分、動物で間違いないと思う。

そんなに暴れはしないけれど。UMA、ではないことを願おう。

「そーいえばタツキも髪切ってたのねー」

そこで気づいたのか今度は俺の髪の毛を指差し、お揃いだねー、と姉が楽しそうに言った。

姉は歳のわりに精神年齢が低い。今は二十一歳だがそれから七、八歳ひいた年齢くらいの精神年齢。

興味が無い物は見向きもせず、少しでも興味があればそれにのめり込んで、1、2ヶ月してしまえばすぐに飽きてしまう。

何年か前、姉がハンバーグを好きになった。

すると次からは殆どハンバーグしか食べなくなり、作っている両親や俺も姉と同じ物を食べることになるから、栄養が偏り過ぎたりして体調を崩したりすることもある。

ビ、ビタミン！ ビタミンが足りない！ と親父が寝言で苦しそうにぶつぶつ呟いているのを、何ヶ月か前に聞いたことがある。

哀れ、親父。

じゃあ3人だけ別の物食べればいいと思うが、家族の食事は皆が同じ物を食べるものだ、と母さんが考えているため、別の物を食べる事を頑^{かたく}なに禁止している。

姉のこの性格の原因は多分5年間の引きこもりのせい。だから、猿みたいな興味の持ち方になったんだと思う。

空腹絶倒

「お腹空いた」

髪の毛を入れた袋の口を縛り終えた姉がそう言う。

何時もなら母さんが帰ってくるまで我慢しろー、と言う所だが、今日は誰も帰ってくるはずもなく、俺と料理のできない姉のために俺が、作ることになる。

今は15時くらいで今から作れば、ちょうどいいくらいの時間になるだろう。

そうなれば早速、とキッチンに行き食パンを見つけこれでも食べろー、と姉に5枚切りの食パンが、まだ3枚入っている袋を投げつける。

片手で器用にキャッチした姉が嬉しそうに袋を開け、もぎゅもぎゅとそのまま食べている。

焼けてのー、食パンくらい。朝いっつもなんとか焦がさないように焼いてんだから。

そう思ったが朝は直感でメーターをセットしてパンを焼いている姉が、夕方でも朝の直感でメーターがセットできるとは思えず

トースターが食パンもろとも諸共黒焦げになっても困るから、何も言わないまま大きな冷蔵庫のドアを開ける。

ドアを開ければ春には寒いとも涼しいとも、どっちとも取れない冷気が顔に当たる。

中を見るとパックに包装されている2切れの鮭の切身を見つけた。よし、今日のメインディッシュにしよう、と思い左手でパックを

取り出し、右手で扉の裏側にある卵を3つ取り出した。あ、落ちる落ちる。

取り敢えずそれらをキッチンの台の上に置き、ブレザーを脱いでシャツを腕捲りする。シャツはまだいいがブレザーを汚したら明日困る。

姉の食べ物の興味は、今は何にも向けられていないから何作っても文句は言われない。だから鮭をどう調理しようか悩む。

もう簡単に塩焼きでもいいけど、ムニエルとかでもいいんだよね……。

鮭ってどうして、こんなに簡単な調理の幅が狭いんだろう。

よし今日はムニエルだー、と何の気なしに直感で作ることにした。塩焼きも捨てがたいが、それはまた別の機会に。

パックの包装を雑に開け、鮭に塩・胡椒を適当に振りかける。

味付けがどうなるうが知ったこっちゃない。辛かったら飯食べろ、飯。

その味が鮭に染みるまでに米を洗うことにした。時間の短縮は主婦の基本。俺は主婦じゃないが。

シンクの下にある棚を開けでかいタッパーみたいな物に入っている米を取り出す。

蓋を開け中に入っているカップに、擦り切れいっぱいまで米を掬って入れる。

米釜に入れた後水をどばどば出しながら、わしゃわしゃと米を洗う。

3回くらい洗ったら水を切り、炊飯器にセットしてスイッチ・オン。

え？ 洗い足りないって？ 不味かったら海苔で巻いとけ。味付け海苔。

「俺は料理をしていいんだろうか……」

ふとここで、自分の料理の仕方のいい加減さに気づいたわけである。

まあ、姉も美味いもんが食べてえとか俺も美味いもんがいいとか、そういうことを頭に入れて料理しているわけもないから、こんな適当な料理になるんだけれど。

俺はともかく姉はそれなりに食べられる嫌いな物じゃなくて、腹に溜まればそれでオツケーみたいな人だから、俺の料理はちょうどいいと思う。

考え事をしながら料理をする暇もなく、先ほどの鮭の水分をなんとかペーパーとかいう紙で拭き取る。

こういう料理の器具みたいな名前は殆ど覚えてないが、用途は覚えていいるからそれでいい。

普通ならここでバット？　みたいなを出して鮭に小麦粉をまぶすんだろぅが俺の場合は、洗い物をできるだけ出たくないからパックの中に、直接小麦粉をぶち込んで鮭にまぶす。ここでも適当さ加減が窺える。

フライパンを熱し、油を少しだけ入れる。少ししてからその中に鮭を入れ焼いていく。

中学生の時にこの料理をやったことがあるが、正式な作り方など殆ど覚えていない。まあ、こんな感じかなーくらいの直感料理だ。

冷蔵庫からバターを取り出して鮭にのせる。表面と裏面がいい具合に焼け、皿に適当にのせる。

盛り付けみたいなのは洒落た料理だけでいいから、そんなに着飾ったような皿ののせかたはしない。

フライパンの中に残っている油をティッシュで拭き取り、流しに入れ水に浸けた。

コンロの下棚からもう一つ小さいフライパンを出し、また油を入れて熱する。

鮭だけじゃ物足りない姉のために、もう一品作る。まあ、作るといっても玉子焼きだけだね。普通の。

そんなこんなで玉子焼きもでき、野菜室からキャベツやらトマトやらを出し水に浸したり洗ったり千切ったりして、玉子焼きと一緒に鮭ののっている皿にのせる。

良い匂いがして吸寄せられたのか、姉がふらっとキッチンに現れた。

食器棚から二人分の箸と茶碗を取り出し、机に並べる。

その時ピー、ピー、という音がした。炊飯器の音で、ご飯が炊き上がったようだ。

椅子に座っていた姉が立ち上がり、自分と俺の分のご飯をよそう。料理はできないけれど、こういう所で何も言わなくてもやってくれるから有り難い。

満腹睡魔

「いただきます」

向かい合わせの席に座り、行儀よく合掌する。

箸を手に取りご飯を食べてみると、少し怪しいがちゃんと炊けているようだ。

しばらく黙々と食べていると、普段食事中は喋らない姉が話しかけてきた。

「そーいえばさー」

「なんだよ」

顔を上げ、姉の方を見る。

「私はさーなんで料理ができないんだろーねー」

長年の問題となっていた姉の問題を本人が問いかけてきた。

いや、そんなこと言われても本人の問題だからなんとも言い難い、というのが俺の答え。

姉が料理できないのは学習能力と記憶能力が非常に欠しいからであって、姉自身が自分で何とかしなければいけない問題だ。

人間の記憶は繰り返し覚えていけば、しばらくは定着するそうだが姉は一週間とも持たない。

それでも姉は成績が良かったらしく、じゃあその記憶力で頑張れーというところ。

じゃあさ、これはさ、もうさ……

「知らん。諦める」

「何もそんな絶望的な答えかたしなくても……」

「事実だろー」

「それはーまあねー」

鮭を解しながら気だるげな声で姉が答える。

野菜も食べる、と箸で野菜をビツとさす。

んー……と姉は、渋々鮭から離れて野菜を口にする。

パパッと食べ終えた俺は流しに食器を持って行き、調理器具ごと丁寧にする。

ここだけ丁寧なのは、洗っておかないと母さんに怒られるからだ。教師とか友達に怒られるのはいいんだけどさ、母さんとか親父に怒られるのはさ、居心地が悪いんだよね……。

あ、俺怒るような友達いねえわ。

別に友達いねえとかで気分がブルーになることもなく、全部洗い終わってからシンクの周りに飛んでいる水を拭く。

姉の方に振り返る。

「取り敢えず、さ。自分の食器くらい洗えるようになったら料理できるんじゃないの？ ていうか洗い物できたっけ」

「しっつれいなー。洗い物くらいできますー」

ブイ、と左手をピースして俺に向けて言う。

うん、それなら安心だと廊下に出て、ブレザーと鞆を持って二階の自分の部屋に入る。

それらを適当に床に置いて、ベッドに倒れこんだ。

あー、風呂入らなきゃなーと思いながら人間眠気には勝てない。
ていうか、何、急に異様な眠気が波のように襲ってくるんだが。
三大欲求に逆らわず生きる姉のようになりたくはないが、こればかりはなー……。

顎が外れそうになるほどの大欠伸が出て、目の端に涙が滲む。世界が少しだけ歪んだような気がした。

……全部全部面倒くさい。俺は異世界には行けないので、世界は歪まないのだ。

そのまま自然と眠りについた。

No.01 閑話休題

昔々に読んだ事がある本に、こんな事が書いてあった。

『人間って何で同じ毎日を繰り返し繰り返し、繰り返して続けるのに

どうしてこうも飽きずに生活し続けていられるのだろうか

その繰り返す変化のない日常から些細な変化や楽しいこと悲しいこと

苦悩とハッピーを見つけているのが人間よ

そんなのはつまらないね。学校生活然り、社会生活然り
もっと大きな変化を見つけて日々をエキサイティングにするのが人間だ

大きな変化だけが楽しい毎日に直結しているんじゃないわ
じゃあ私がさっき言ったことを少しずつ見つけてみなさいよ
きつと楽しいわ。些細な変化こそ人間の喜びなんだから
そして生きがいでもあったりするんだわ
』

美しい綺麗事、どうもありがとう。特に女性らしき方。

子供向けの絵本だったはずだけど、こんなにも小難しい事を書いて誰が理解できるのだろうか？

少なくとも、あの時小さかったあたしにこの話はよく分かりませんでした、人生楽しめとか捨てたもんじゃない、ということが言いたいんですか？

そうですね。自殺志願の廃怠者を引き止めようとしても？
じゃあ、あたしは違うのだから好き放題やっていいんですか？
そうじゃないんですか？　じゃあ何だというんですか？

とても小さくて些細な日々の変化なんてあるわけがないんです。

毎日毎日違う出来事が起こるから人間は生きていられるんです。
小さな変化しかないとしたら、毎日受ける授業の内容が違う、と
いうことしか思い浮かびません。
それじゃあ、つまんない！！　って思います。

大きな変化は大切です。

毎日毎日別の日だから、友達と話す内容も変わって誰かに会える
日と会えない日もあって、呼吸をするように盲目的な恋なんかして
玉碎して悲しんで、また、別の恋に移るんです。人間って、そう
いうもんなんです。

大きな変化と些細な変化の違いは何ですか？　と問われても
捻くれて頭の悪いあたしには何の答えも出せないけれど

毎日を楽しむ。

それだけでいいと思うのです。

n			*
u	b	A	*
n	y	n	*
k	t	u	*
n	r	n	*
o	u	o	*
w	e	w	*
n	c	n	*
	h	d	*
g	a	a	*
i	r	t	*
r	a	e	
l	c		
	t		
	e		
	r		
	-		
	-		
	a		
	c		
	e		
	r		
	t		
	a		
	i		

忘却疾走

「もーもちゃーんかーえろー」

臨時のHRも終わり、帰る準備をしていると、琴音が声をかけてきた。

教科書とか色々鞆の中に適当に詰め込んで準備完了。

教室の後ろの扉であやと琴音がもう待っていて、急いで二人の元に行く。

三年生の教室は三階に集まっていて、屋上も微妙に遠くて一階から上がるのもしんどい。そんな微妙な位置にある。

どうせなら、二年の教室がある二階とかキリのいい四階とかにしてほしい。

あー、でも朝遅刻しそうな時に四階はキツいかなー。

そんな事を私が会長とかに抗議したところで、何も変わりはないけど、生徒の意見とか尊重してほしい。

学校っていうのは民主主義の政治だから一人だけの意見は通されないけど、そういう考えがあるという事くらい頭に留めておけ、会長。

階段を三人で降りる途中、隣で琴音とりあやがわいわいがやがや話している時に、そんなことを考えてみた。

この頭の中討論もどきを聞けば真面目風に聞こえるかもね。実際私は真面目じゃございませんけど。不真面目不真面目。

「あ」

なんとなく鞆の中を覗き、教室に忘れ物をしたのに気づく。

「どしたのーももちゃん」

きょとんとしたような顔で琴音が尋ねてきた。

三人とも階段を下りている途中で降っているから、邪魔になっている。

通行の邪魔になってとやかく言われたくないあたしは、流れに逆らうように階段を上り始める。

「おい、一条どうしたんだ!？」

急に階段を上り始めたあたしに驚いたように、あやが慌てて引き止めてくる。ええい、引き止めるでない!

そんな事を言えるはずもなく足を止めて振り返る。

「教室に忘れ物したの!!」

「何でちよつとキレてるんだ」

「ここで待つてようかあ？」

「先行つて。電車遅れたらどうしようもないでしょ。後から走つて、できるだけ追いつくようにするから!」

二人を置き去りにするように走つて階段を上り始める。

じゃあねー、という琴音の可愛らしい声が聞こえるけど、この時ばかりは、無視!

さつきは一階まで降りる階段の途中だったから、またもう一階分の階段を上らなきゃいけない。

さつさと上つて二人に早く追いつきたいところだけど、下校する生徒で階段は溢れている。

その流れに逆らっている生徒はあたししかないから、どうにも進むことができない。

人と人との間を切り抜けなんとか上りきり、教室に入る。

机の中から携帯電話を取り出し、スカートのポケットに入れる。危ない危ない。忘れてたらこの休日二日間を携帯電話無しで過ごすところだった。

魔術を使えない文明人のあたしにとって、携帯電話は必要不可欠なものだ。

いや、高等魔術師の琴音だって携帯電話持つてるけど。

魔術師って携帯電話が無くても、魔術で電波とか電話の回線？に直接アクセスしてそのまま話せるらしいし。

何回かそういうことがあったけれど、携帯電話を通じて話すよりも声が鮮明だったのは記憶に新しい。うん、昨日の事だ。

他にも忘れていないか最終確認をして教室を出る。

走って追いかける、って言ったけど走るのって面倒だし駅前の大通りに出たらどうせそこですぐ別れるし、追いかけてなくてもいいかな、と思う。

あたしはあたしのペースで、自由に帰ろう。

友達がどうでもいいとかそういうことじゃない。あたしがマイペースなんだ。B型です。

しばらく廊下を進んでいると、背の高い男子と二年生の女子が話しているのが目に映った。

男子の方は同級生で知り合いだから、何があったのかと思い聞き耳を立てる。結果、何も聞こえなかったけれど。

二年生女子がお辞儀をして男子と別れてからこっちに向かって小走りで走ってきて、あたしのクラスの三つ隣の教室におずおずと

入っていった。

あたしのクラス＝四組
三つ隣のクラス＝一組

ということ、二年生女子は一組に入って行った。途中ですれ違
ったけれど、全く知らない顔。

けれど、どこかでみた事があるような誰かの面影がある顔立ちだ
った。

どこで見たっけなー、誰かに似てるよなー。

そう考えながら背の高い男子に、抜き足差し足忍び足で徐々に近
づいていく。

昔の浮気

「ユター、見ちゃったよー」

背の高い男子こと、浅木悠太あさぎ ゆうたの背中をぽんぽんと叩いて呼びかける。

琴音の声遣いを意識して、少し琴音の口調を真似て。

すると、ビクーツと肩が震え上がり、ゆっくりと悠太が振り返る。

「……っはー、んだよ一条かよ！ てか、ユタって言うんじえねえ！」

「一条で悪かったわね。可愛いじゃない、ユタ。琴音の方がよかった？」

「いえー、滅相もない。あー、一条さんでよかったなア」

「棒読みすぎて感情が伝わってこないじゃないの」

ユタ、という自身のあだ名に対しては何も言わなくなった。

それにしても、悠太が振り返った途端失礼なことを言ってくる。

謝罪の言葉も棒読みにしか聞こえない。

悠太は背が高くて話す時も首を上げて話さなきゃいけないから、とてもしんどい。

身長180？って化け物か。そんな長身の悠太は、琴音の彼氏だ。

「琴音に言いつけるわよ」

「何をだよ」

「さっきの女子のこと」

「俺は女子と話すことも許されないのか!？」

「二年生だったからね。話すなら三年にしなさいよ。ロリコン疑惑？」

「違う！」

あたしの冗談に悠太は全力で否定するように、首を勢いよく横に振る。なんかもう、速く振りすぎて残像が見える。

琴音に女子の事を伝える。それだけでジルバが嫌がっているのは、彼女の琴音はとても嫉妬深いというか、妄想癖だから。

つまり、女子と話してたら「浮気だー！」と琴音が大騒ぎするのだ。

琴音と悠太は、中学生の頃から付き合っている長寿カップルだ。

そのまま一気にゴールイン決めたれ、と言いたくなるほど、まだまだ熱も冷めてないお熱いアベックだ。カップルって言うのかこの場合は。

あたしは去年彼氏ができたばかりだけど、この二人の熱さには到底勝てそうにもない。でも、ラブラブなことはいいことだよな。めでたいし。

あたしはまだ見た事ないけど、悠太は喧嘩っ早くて、誰かが目を離せばどっかに行つて喧嘩とかたまにしているらしい。

そんな悠太だけれど、琴音には頭が上がらない。

これはほんの一事例。

昔々、と言っても2年位前だけれど、一年生の頃の冬のある日。悠太に彼女がいるのを知らず、告白してきた同級生がいたらしい。

この時の悠太は学年の中でも問題児になっていたけれど、この年頃の女子はちょっとワルい男子と、その高身長によってカッコよさが二割り増しされていて男に惹かれるらしく、悠太はそこそこモテ

ていたらしい。

その時期はあたしもクリスマス前っぽく、告白ラッシュでした。全部断ったけれど。これは、一余談。

その告白を誰かを介して聞いた彼女の琴音が黙っているはずもなく、すぐに悠太の元に行き浮気したのか、と問い詰めたらしい。

この時点で琴音に伝わっている情報が間違っているけれど、そんな琴を嫉妬心で心も体も染まっている琴音が知る由よしもない。

弁解空しく悠太が負けた後に琴音の言った置き台詞が

「ユタは、琴音よりシチューの作れる家庭的な女の子の方が好きなのね!!」

だったらしい。

意味不明な台詞だった……と、ユタこと悠太は後日あたしに泣き言を言ってきましたとさ。

嘔吐き女

「勘弁してくれ……それだけは……」

悠太が背中を丸くし、苦悶の表情を浮かべた。

その体勢と負のオーラが悠太を覆っていることもあり、いつもより小さく見える。

あの、問題児、浅木悠太が、弱っている!!

それだけでなんだかとても楽しくなってきた。

サドっ気があるとかそんなんじゃないとは思っけど、普段粗暴な人間がこんなに弱っているのを見るのは楽しいもんですよ。

「じゃあ、琴音には教えないから」

「助かる、一条……ん？ から？」

あたしが琴音には浮気現場（嘘）の目撃を教えない、という旨を悠太に伝える。

しかし、それだけですまないのがあたしであるのだ。あたしが口にした言葉に対して、悠太は眉を顰め不思議そうな顔をする。

「チョコパ一杯」

「よし、分かった」

琴音には教えない交換条件として、チョコレートパフェを奢れ、というのを出す。

「あら、意外とあっさりしてる」

「黒崎のヒステリーが俺に来ないなら安いもんだろ」

「でも駅前のカフェのよ」

「はあ？　つぎけんなよ！　あれ一杯七百円もするんだぞ！？」

「いーじゃないそんくらい！　ケチケチすんな！」

悠太と交換条件について互いに叫び合いながら討論する。

あたしは条件を呑め！　と言い、悠太はフルーツのパフェにしる！　と言う。

たしかに、フルーツパフェは五百円でお手頃だし、美味しいですよ。ええ、ええ。ただね、あたしはチョコが一番好きなのよ！！

「あーっ！　もう、分かったわよ！　それならチョコパ二人で食べて割り勘すればいいんでしょ！」

これで条件呑め！　やっぱ三分の二は悠太が払え！」

「んなっ！　？　んなことしたらあいつ、萌さんとられたーとか言っただけじゃねえかよ」

「そんなときは雅斗いないんだから言わなきゃ分かんないでしょ！」

「チッ……分かったよ。その代わり、三分の1、お前ちゃんと払えよ」

「それくらいするわよ、失礼ね！」

ハンッ！　と踏ん反り返ったようにあたしは笑う。えー、5分ほどの討論を終え、無事に交渉が成立しました。

オメデトウ、あたし。こっちが条件出したのに代金払うのは嫌だけれど、普段より安くチョコパが食べられるのならその条件呑んでやろう。

いや、割り勘しようってのはあたしが言ったんだけれどね。

因みに、あいつ、とか雅斗、というのはあたしの彼氏の事であり、

うんまあ、付き合っているわけである。彼氏だから当然だけれど。その雅斗について一言で表そう。“男の娘”。

「それで、いつ行くんだ」

ハーツと重い溜息を一つ吐き、悠太が茶色に染めた頭をわしわしと掻きながら言う。

悠太は髪が短いから、掻くっていうか掴んでいるようにしか見えない。硬そうですね、その髪。

「日曜でいいでしょー。あんまり遅かったら間違って琴音に言うかもしれないしね？」

「いいかお前、言うなよ、絶対に言うなよ。もしパフェ奢ってから言えば、お前もう絶交だからな」

「切るほどの縁が無いと思いますけど」

鳩が豆鉄砲を食らったような顔をして悠太が驚く。

まあ、そんな表現を使われるような顔をあたしも初めて見たわけで、面白い。

あー、あー、と悠太が言いくそうに口を開く。

「そうだったな……。お前は黒崎の友達で、俺の友達ってわけじゃなかったな」

そうそう、あたしはあなたのオトモダチではないんです。

あたしにとつてのあなたは、ただの知り合いで、親友の彼氏ってだけなんです。

講座開講

「友達、じゃないんだよ」

口に出して悠太に告げる。

気まずそうに目線を逸らされ、10秒ほどの沈黙が続いた。

ふと窓に目をやると、たくさんの生徒の中にあやと琴音の姿が確認できた。

「琴音、そこにいるね」

「……………そうだな」

同じ景色を見ていたのか、誰に向けるわけでもなく呟いた言葉に悠太が反応する。

琴音だけを見下ろしているだろうその目は、なんだか切なさうに見えた。

いつもなら、琴音がいきなり悠太に抱きついた時も、迷惑そうにしているもその表情はにやけていて

その黒い瞳は少し嬉しそうにキラキラとしているのに。いつもと違う悠太の目に少し戸惑った。

「さっきのは、北上の妹だ」

琴音たちが窓を介して見える景色の中から見えなくなった頃、悠太が唐突に口を開いた。

こっちに向き直ったその顔は、いつもと同じ無愛想だけれどどこか親しみやすそうな顔も、目つきの悪いその黒い瞳も。

いつもと同じ、変わらない。口調も声の明るさも同じで、いつもの悠太に戻っているようだった。

「さっきの黒髪が？」

「黒髪つて……。まあ確かにそうだけだな。

顔立ちあまり似てないし、髪の色は正反对だから違うと思ったんだがな。北上の事は兄さんとか言っつて、苗字も北上らしい」

「へえ」

予想外の新情報に意表を突かれた。

ついでに先ほど見た黒髪の女子の姿を思い浮かべる。……うん、俯いてたし少しは見えただけど顔なんて覚えてるわけないわ。

淡々と語る悠太の言葉に合わせるように、一定のリズムで相槌を打つ。

ここで、北上こと北上^{だいき}醍輝の話しよう。

北上醍輝。三年一組。十七歳。男。銀髪。茶色の瞳。身長体重座高視力、全て不明。

恋愛遍歴は非常に多彩。友人情報によると、ここ三年間で約10数人の女子と交際と破局を繰り返しているとか。

しかし現在は女の匂いがしないため、交際している女子はいないとみられる。だって。

そんな遍歴に見合うようなとてもカッコいい容貌。銀髪と茶色の瞳の組み合わせは、一部の女子の受けもいいようである。

更に文武両道なためそれに惹かれた女子も多い。

北上は告白されれば断らない性分のもうで、誰かが好きだ、とい

うような彼自身の話は聞いたことが無い。

繰り返される破局の半分以上は北上から別れを告げているらしい。理由は不明。

しかし破局後の女子は付き合っていた当時と変わらず、彼を好きなようである。

それだけ。あたしが知っているのはここまで。彼もまた、悠太と同じで、友達ではない。

強いて言うならば悠太と、あたしの彼氏の共通の親しい友人だ、ということだけ。

彼とだけはあまり話したことが無いし、話していて楽しくなるような会話は無かったような気がする。

あと一つ知っているのは、あやの幼馴染だということだけ。

以上、あたしの脳内北上醒輝講座終了。

「さつき北上がいるかどうか聞いてきたんだ。一組にいると思うが見に行ってみるか？」

あたしの右後ろにある一組の扉を指差しながら悠太が言う。顔だけ扉に振り向かせ、悩む。

今、北上兄妹に会ったところであたしは二人に話すことなんて一切ない。

それどころか話すのが苦手な兄と少し話したことがあるからといって、そんなに話が続くものじゃないし、兄があれば妹も苦手だろうと勝手に推測。

でも、もし妹の方は明るい人なら話すに値して惜しいことしたない、って後悔するかもしれない。

それは、嘘なんだけれど。

「んーん、やっぱいいや」

「そう、かい」

顔の向きを戻して首を横に振る。悠太が扉を指していた指を曲げ、力なくだらりと右手を下げてポケットに入れる。

その何気ない一連の動作さえ、なぜかもどかしい。心の中が少しむずむずするような、そんな感じ。

人はこの奇妙な感覚を恋だと言っけれど、そうではないと信じた
い。

だって、悠太は琴音の彼氏で、あたしにも彼氏はいるんだから。

「んじゃ、そろそろ帰れよ。俺は用事あるからまだ帰らないけど」

「そう、じゃあまた日曜日に。すっぱかさないでよね」

「すっぱかさねえよ。それなりに金持って行つてやる」

「じゃあ全額払つてよ」

「それは嫌だ」

少しだけ笑いあつて、手を振つて別れた。

あたしはそのまま前に進み、悠太はあたしが来た方向に向かって歩いていく。

体が触れないような微妙な距離感で、交差する。

爆弾舞台

「友達じゃあ、ないんだよなあ」

ふと呟く。

学校の敷地内から出て、朝とはまったく違うスローペースな二足歩行で家までの距離を縮める。

朝も、もちろん二足歩行だったけれど。

悠太に言った言葉をもう一度呟いたのに意味なんてない。

もしかしたら、あんな風に悠太の弱みに付け込んで、パフェを奢ってもらうのも意味はなくて、弱みに付け込むこと自体意味はなくて、琴音と悠太がこの先どうなろうとあたしが関わる事じゃなかったりしたら、それこそ意味のない事を繰り返してきたことになる。

『つまり、君のすべてが無意味で無味無臭なんだねッ！！』

ええ、そうかもね脳内マイダーリン。鬱陶しいから少しだけ黙ってちょうだい。

無味無臭なんて形すら実在しないあなたに言われたくないわ。

あたしはついに頭でもおかしくなったのか、突然現れた脳内マイダーリン（仮）に文句を言う。

四月も後半になって少しだけ春が終わりそうな予感がする。

今年は暑くなるのが早いのか、少しだけアスファルトから来る熱気にうだりそうになった。

照りつける太陽の暑さにも負け、立ち止まってブレザーだけを脱ぐ。ブレザーの下にはカーディガンも着てたから、暑いのは当然。

あたしのカーディガンは茶色の長袖だけれど、黒じゃなくて本当によかったと思う。

黒ならさらに熱を取り込んで暑くなること間違いなしだ。来週からはカーディガンだけにしよう。うん。

鞆を肩にかけ、その鞆とあたしの体の間にブレザーを挟み、再び歩き出す。

歩くのが遅いのに定評のあるあたしは、15分位かけて家に辿り着く。

相変わらずひっそりとした佇まいの小さな家だ。一般家庭にあるような家に見合う小さな駐車場には、もちろん車なんか止まっていない。

門を開ければ少しだけ植木鉢が並んでいる。中には肥料と土が植木鉢らしく入っているけれど、その中に美しい花を咲かせる種子は入っていない。

それどころか、土は最近雨が降っていないのや水をやっていないのも相対して、乾ききっている。花を嗜む趣味のないあたしにとっては、当然の結果だ。

スカートのポケットに入っている携帯と同時に小さなキーホールダーの付いている、家の鍵を取り出した。

右手の中指と薬指と小指で携帯を持ち、残りの二本の指で鍵を持ち、苦戦しながら鍵をガチャリ、ガチャリと開ける。

ワンドアツーロック。防犯対策もばっちりだ。

鍵を持ったその手をもう一回スカートのポケットに入れ、それら

を中に入れて手を引き抜いてから家のドアを開ける。

心理葛藤

「ただいま」

誰もいない虚空に向かって言うように、小さく挨拶をする。

誰もいないのは当然のことだけれど、これで誰かがいたら面白い。でもそれじゃあ泥棒とか空き巣とか不審者とか不法侵入者なんだよなあ。

なんか同じものが混ざってるけどあたし的には別物だから、区別。

誰もいないからといって小さい頃からのこの習慣を、いきなり止められるわけじゃない。

両親と住んでいた頃はお母さんが家にいたけれど、返事をしてくれるわけじゃなかった。

でも、言わなきゃ後からぶちぶちと文句を言ってくる。

親つてのはどうしようもなく面倒くさくて、捨てられたらとても楽になれる。

けれど親を捨てても、あたしが捨てられても、後に残ってるのは虚無感と、心の中に小さく開いた穴だ。

その穴は誰にも埋めようがなくて、早く埋めなきゃ、喪失感だけがその穴を埋めることもなく覆ってしまっ、一生埋まらなくなる。

寂しい寂しい寂しい寂しい寂しい寂しい寂しい、あたしの心がお父さんにもお母さんにも気づかれることなく、ただただ取り残されていく。

きつとあの穴を埋めてくれるのは両親だったんだ。

今更気づいても後の祭りで、その穴は覆われてしまってもう埋まらない。

[illegible]

もう平気だ。もう慣れた。もう後悔していない。もう、両親に会いたいなんて思わない。

だから一人で、独りで生きるんだよ。

「ぶあ——か」

記憶の中、薄れていく両親にぐっばい。両手を大きく振り上げ、別れを告げよう。

大きく背伸びしてジャンプして、そうしたら両親はあたしに気づくんだろうか。

いや、気づかなくていいかもしれない。やっぱり気づかないで。あたしのことは見てほしくない。

喧嘩ばかりしていたお父さんとお母さんへ。

どつどつどつどつどつ、お幸せに。

『感傷に浸って両親のことでも思い出したのかい？　そうだとしたら、嗚呼！　なんて無様なことだろう！』

気づけば頭の中は両親との思い出でいっぱいだ。

思い出なんて薄っぺらくて、四百字詰め原稿用紙に一つ一つ書いていてもきつと、一枚だって埋められないだろう。

その中に本当に楽しかった思い出なんて、無いに等しい。

記憶力が悪いわけじゃない。むしろ、記憶する事に関しての能力は、長けているといっても過言じゃない。

原稿用紙半分程度の思い出と記憶の中の両親、そして脳内マイダーリンの声も全てシュレッダーにかけ記憶の中の広大な海にばら撒く。

もう戻ってこなくていいものだから。

玄関で靴を適当に脱ぐ。後ろに蹴るように雑に脱いだから片方の靴が壁にぶつかった。

音が聞こえるから、どんな風になったかは安易に想像できる。

音が聞こえるのならこの目はいらないのかと言われたら、そうじゃない。

そうじゃないけど、想像することを忘れ現実には目を向けない人。そんな風にはなりたくない。

ドアの鍵を閉め、重い足を上げながらゆっくりと階段を上がる。

朝の慌しさを忘れてしまったかのように、ゆっくりと。

二階の廊下をすり足で歩きながらクローゼットに向かい、中からハンガーを取り出す。

ハンガーにブレザーだけをかけ、元あった位置に押し込むように乱暴に入れた。

自分の部屋に入り、鞆をベッドの上に放り投げる。

二教科分の教科書しか入っていないその軽い鞆では、あたしがダ

イブしたようなあのスプリングの軋みは感じられない。

悔しくなり、鞆を押しつぶさないようにもう一度ダイブ。

「あ——っ」

濁声を上げながら倒れこむように、どすんとダイブ。

今度は朝のように、とまではいかないけれどスプリングが軋んだようだった。ギィ、という音が聞こえ、満足。

満足感に浸りながら、起き上がり壁にかかっている時計を見る。

「11時か……」

非常に、微妙な時間。おやつの時間、ではないしお昼の時間でもない。悩んでいても仕方ないから、お昼を買いにいこう。

自分に語りかけ、物が散乱している机の上から黒い縦長の財布を、物の間から引っぱり出す！

すると案の定財布の上にあつた物が支えを失って、床にドサツ、と落ちた。

溜息一つ、吐いてみる。なんだか今日は溜息が多い。

床にしゃがみ落ちたレポート用紙やポーチなどを拾い上げ、散乱した物の上にまた積み重ねるように置く。

あたしの机の上は汚い。自分でも自覚している。けど部屋は汚くないのは、物があると全部机の上に置いてしまうからだ。

片づけする気なんて当然起きなくて、そのまま異常地帯となっている机を放置。

着替えないまま玄関でもう一度ローファーを履く。近所のコンビニ二におにぎりでも買いに行くつもりだ。

あんな低価格で美味しいおにぎりが食べられるなら、いくら買っても後悔しない。

よし、出かけよう。

鍵を持ち、さっき閉めたドアの鍵をまた開ける。

これから買うおにぎりの種類はわからない。

けれど、明日は楽しみで仕方が無い。

「
いつてきまーす」

誰もいないのに挨拶をして、家を出る。

その積み重ねが、きつとあたしだ。

絶叫虫意

耳の奥で虫のざわめきが聞こえる。

葉桜の風に揺られる音がする。

車が道を走る耳障りで大きな音が聞こえる。

ガタンと揺れ、線路をただ走り続けるしかない電車の音。

人の話す声と足音、ドアの開閉する音が聞こえる。

けたたましい相棒の機械音は、聞こえない。

布越しの肌に優しく触れる、震え続ける冷たいそれ。

優雅なんてとてもいえない、朝か夢か。

「……っ、ピカソ！」

謎の寝言とともにガバツと顔を上げる。

同時に携帯電話が震えているのが分かり、急いでズボンのポケットから取り出した。

画面に映っているのは発信者の名前。

【赤石瀬七】

カーテンを閉めているせいでよく分からないが、もう朝になっているようで、朝日が差し込んでいる。

昨日ベッドに倒れこんだときからいつの間にか眠っていたらしい。駄目だ、完全に姉と同じような生活サイクルになりかけているんじゃないか？

それだけは避けたいよな、何せ姉は二トだ。社会生活不応者、とも言い換えることはできるが。就職活動しなくても、大丈夫なんだろうか……。

考えても無駄な姉の事は頭から追い出し、携帯電話をぱかと開き発信ボタンを押す。

「ふあ——い」

《おはよう宮本。よく眠れたかい？》

携帯電話に耳を当てると、いつもより少し音質が悪い瀬七の声が聞こえてきた。

朝っぱらだというのに瀬七の声は昼間のように明るい。

「それはーもう……ぐっすり……」

《おーい、寝るんじゃないよ。起きやがれ寝坊野郎が》

「いやだってこれ眠い……。……は？ 何だって？」

瀬七の言葉に、耳を疑う。

《だから、寝坊野郎だって言っただよ、お馬鹿サン》

寝坊寝坊寝坊……その熟語が頭の中でぐるぐると回り続ける。

急に背中を冷たい手でサッと撫でられたように、背筋が寒くなる。ブルツと震えた。

携帯電話を耳から離し、傍にあった目覚まし時計をゆっくりと見る。黒を基調にした四角くシンプルな目覚まし時計。

その長針が指しているのは4と6に挟まれた5という数字。短針

が指すのは、10と11の間だった。

「10時25分。ジャラジャラチーン。

そこで目が覚める。

「嘘だろおおおおおおお！？」

俺の叫びは家中に響いた。

怒声罵声

「ちょっと！　うるっさい！　何騒いでんの！」

階下から姉の叫ぶ声が聞こえる。その怒りに触らぬよう、ごめん！　と叫び返す。

謝られて納得したのか、もう姉の声は聞こえなかった。

《おやおや、朝、いや昼間から姉弟喧嘩とは。よくやりますなあ。あと宮本、さっきの叫び声うるさい。こっちにまで漏れてるんだけど》

いつの間にか携帯電話が口元と耳に近づいていたのか、瀬七の不満の声が聞こえる。耳が痛いー、という訴えまで聞こえてくる始末。

「あ……すまん瀬七。大丈夫か」

《はあ……何でそんなに落ち着いてるのかなー。耳の事はもういいよ。それよりどうすんのさ今日は》

どうすんの、というのは多分学校に来るか来ないかのことだと思う。

もうすぐ10時30分になるとしても、今は2限目の終盤のはずだ。

今から急いで行っても3限目の始まりに間に合っはずがない。急いで行って途中で教室に入れば、クラス中の笑いものだ。

でも笑い声すら起きないだろう。どうせ俺には無関心だろうし。

笑うのは瀬七と教室内にいるであろう鎮西だけだろう。

あまり目立ちたくないというのが俺の本心だ。目立ちすぎて、また人に見られるのは恐ろしい。

友好的な関係を築こう！ という考えは俺の中には無い。だが独りになるのはあまり好きではない。

けれど差別する事もされる事も無いこの状況が一番マシだと思える。それくらいの境遇だ。

「4限目の前の10分休みに行くよ。ところで瀬七、お前なんで授業中に電話してるんだ」

《野暮なことは聞かなくてくれよ宮本。トイレに行ってきますー、とか言つとけば、廊下で電話しようが僕の自由じゃないか》

「ああ、なるほど。トイレね」

それなら納得。

授業中に電話しているのは話している途中で気がついたが、まさか授業抜け出してるとは。

瀬七は基本、授業をそこそこ受けているが電話のために授業抜けるとは。友情に乾杯。ありがとう友よ。

《なーにをトイレで納得してんの。それじゃあ僕授業戻るからそろそろ切るけど、ちゃんと来なよ》

「おう」

そこで、ピッとボタンを押して通話終了。

うーん、友のモーニングコールは強烈だったねー。どうでもいいけど姉の朝食準備しなきゃなー。

心で考えてることとは裏腹に、部屋の中にあるクローゼットの中から綺麗にアイロンのあてている長袖のシャツだけを取り出し、着替える。

やっべ、風呂入ってねえ。とは思ったが汗掻いてないから別にいい。昨日まではシャツの上にブレザーだったが、今日からはセーターにしよう。

指定が無いから俺のセーターは黒だが、夏場が近づくと異様に暑いという欠点がある。

それは買った俺が悪いんだけど、更衣期間をもっと早くしてくれ、と言う俺の願い。

届け、お堅い頭の教師どもと生徒会長の頭の中に。

着替え終わり、鞆の中を4、5、6限の時間割に教科書を変える。鞆の中身をもう一度確認し、脱いだシャツと鞆だけを持って一階に下りる。

階段を下り廊下を挟んだすぐ先にある居間では、姉が床に寝転がりながらドラマの再放送を見ていた。

刑事ドラマのようで「待て！ 悪党ども！」「悪党はおまえだあ！」「と言うような、ブラウン管越しの声が聞こえる。

……刑事ドラマらしいが、ここだけ聞けば一種の漫才のように聞こえる。

「ちゃんとソファー座れよ」

「んー」

注意すると姉はのっそりと起き上がりながら、ソファーに座る。

それでもダラーっと姿勢を崩してるから、あまり効果が無いように思えた。

「飯食ったかー」

「おー食ったどー」

右腕だけを上に伸ばし親指をグッと立てる。

それは、なんだろう。ナイスのサインのはずだが、どうだ！というような自己主張が含まれている気がする。

それよりこの姉、食パン昨日で尽きたのに何食ったんだ。

「何食った……ハッ、まさか！？ ひもじさのあまり、庭にある草でも……」

「んなわけないでしょ！ ちゃんとしたもの食べた！」

「冗談だよ」

一呼吸おいて何を食べたのか聞くと、銀シャリ食べたー、と言った。

銀シャリとはまた古き良き言葉だ、と思いつつ炊飯器の前まで移動し蓋を開け中を覗くと、むわっとした熱気が顔を覆う。

どうやら、昨日残った飯を保冷するのを忘れたまま眠ったせいかスイッチが入ったままだったらしい。

当然姉がスイッチを切って保冷する。などという技術を持っているはずもなく、そのまま放置状態のようだ。

朝起きて何も無いから姉はこれを食べた、と。そういうことか。

ピツとスイッチを切り、椅子の上に鞆とシャツを置いて食器棚から自分の茶碗を取り出す。

釜の中に入っていた、酷く熱いしゃもじを持つことに苦戦しながら少しだけ残っていた飯をよそう。これが今日の朝食だ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5117y/>

でいばいyouth

2011年11月30日12時51分発行